

332

356

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

始



エドジョ62

著 城 鷺 崎 鶴

382
✓
356

得意の人
失意の人



得 | 失

意 | 意

の | の

人 | 人

大正
1.10.21.
内交

鶴崎蘆城著

●明治策士傳

近刊(起稿中)

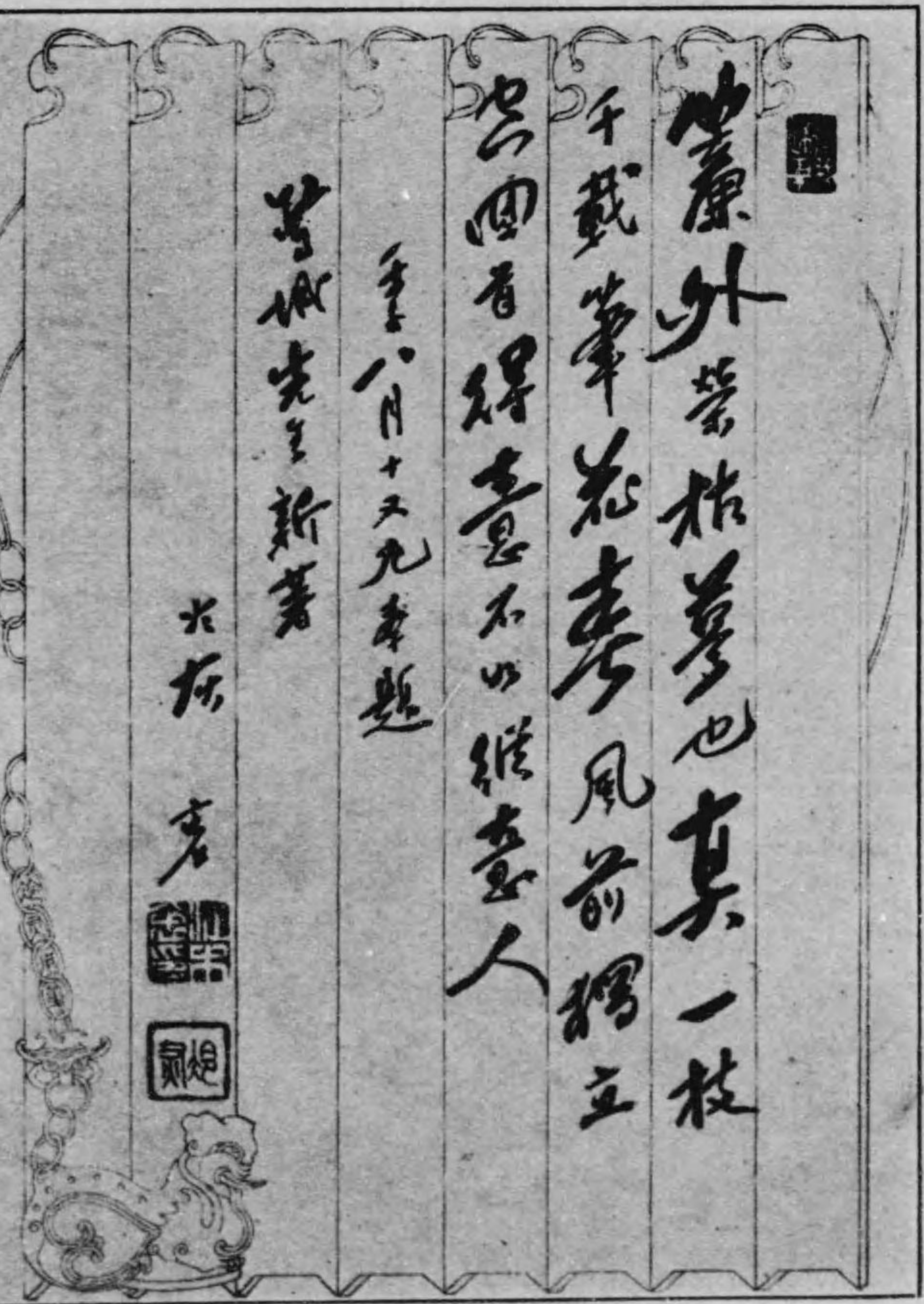
●
中原外著枯夢也真一枝
千載筆花春夢風前獨立
忠回者得意不以繼臺人

壬午八月十九日奉題

鶴崎蘆城著

大友

春



得意の人・失意の人に題す

如何なるを得意と爲し、如何なるを失意と爲す、六國の印
綬を佩びて未だ必ずしも得意とせざるものあれば、五柳の
陋巷に嘯きて必ずしも失意ならざるものあり、竹林の白眼
を以てすれば白馬銀鞍の客何ぞ營々たる、晏子の御者眼を
以てすれば自動車上の人何ぞ堂々たる、富貴なるもの必ず
しも得意ならず、一簞食一瓢飲回也は其樂を改めず、冬一裘
夏一葛仲蔚は其大を樂しむ、妓を東山に携へし謝安何の失
意かある、一たび桓温の司馬となりて又何の得意かある、曾

二
て東山に歸臥せば蒼生を如何せんと云ひ、一たび朝に立てば蒼生卿を如何せんと云ふ、故に范蠡は五湖に掉し、子房は赤松子に従ふ、由來衰颯的景象は盛滿の中に在り、發生的機會は零落の間に存す、得意の時に在て退一步を思ひ、失意の境に處して進十歩を想はゞ、人生の得喪我に於て何かあらん。『得意の人と失意の人』を讀み獨り自ら警む。

大正元年八月

古一念 古島一雄

鷺城詞兄

村井吉兵衛は日清戰役後、人を採用するに當り、同戰役中何かの仕事に有り付き居らざりしものを排斥したりと云ふ話柄あり。何の理由に基きしやの明かならざれど、想ふにあれ程人の入用なりし時に遊び居る代物は、どうせ馬鹿かクセ物かなるべし、馬鹿やクセ物を相手に文明の仕事をなすは則ち甚だ困難なるためにてもありしか。村井の概定の當不當はしばらく措き、冷眼にして世上を見るに得意に居る人は總じて才氣もすぐれ居るが如く、失意に居る人は所謂

クセ者少なからざるが如し。

されば概して謂ふ時は、得意に居る人は日本米にして、失意に居る人は外國米なりとも言ひ得べきなれど、共に斗筭の輩たるに於て同質なるべし。余は失意の外國米を、救世軍の手を経て、ヨリ割安に買はんとするものにあらざれども、日本米の餘りに高價に買ひかぶられ居るに不平なるものなり。來年は豊年なるらし、白米恐らくは二十錢以下に降らん。余は深く人物相場の調節を欲す。

大正元年八月七日

友人

相島 虚吼

序

昔者韓非は説難を著はして人に説くの難き事を論じた。其大意に言ふ。説の難きは事理を明かにして他人をして悦服せしむるのが難いのではない。説くべき者の心事を忖度して之れに投ずるのが難いのである。世には名高を貴ぶものもあれば、厚利を喜ぶものもある、又心に厚利を喜んで口に名高を粧ふものもある。陰に名高を欲して陽に厚利を口にするものもある。これ等を區別せずして、一に名高のみを説けば、或は斥けられ、或は表に容れられて實は疎せられ

二
る。逆まに厚利のみを説けば或は卑められ、或は心に容れられて口に疎せられる。これが遊説の困難な點であると云ふが、こは唯り遊説のみではない。人物の評論に於ても亦同様である。

他人を評するは好んで人の爲すところであるが、然かも評し得て肯綮に中らん事は極めて困難である。之れ其閱歴を叙し事業を述ぶるのが難いのではない。其人物の本心を洞察して、其眞面目を躍如たらしめるのが難いのである。蓋し人心の異なるのは恰も其の面の異ると同様で、殆んど百人

百様である。表裏もあり、曲折もあり、隠顯變化が極まりないから、其眞相は容易に端倪すべからざるものがある。其多種多様なる只に名高と厚利とのみではない。されば人物評の困難は遙に説難に過ぐる者がある。

其上人物評論の困難は、今人を評するに於て一層甚しいものがある。西洋の諺に、何人も其従者の目には、英雄豪傑とは見えないと云ふ言葉がある。全く其通りで、世に完全無缺の人物はないから、平生其傍に在つて、總ての弱點まで知りぬいて居る従者の目には、英雄もさ程かけはなれた人間

とは見えないのである。豫言者郷里に容れられずといふも亦この爲めである。同様の理由で同時代の人から見た現代の人物程真相の反つて誤られ易いものはない。所謂人生棺を蔽ふて是非始めて定まるの類で、古人の評論は比較的樂であるが、今人の評論は極めて困難である。

しかしながら孔子も説いた如く、具さに其爲す所、由る所行ふ所を察すれば、人物の真相も遂に臆し終る事は出来ない。言論も行動も畢竟人物を示すものである。思ふに人物評家の要諦は、其人物の言動を詳細に観察し、機微の消息の間

に其眞意を看取するにある。首を打てば尾到り、尾を打てば首到り、中を打てば首尾共に到ると云ふ彼の常山の蛇を學んだ長蛇の陣法の如く、少しもぬからぬ陣立て観察をせねば人物の真相は捕捉する事が出来ないのである。

観察は如此綿密にして一絲忽がせにしてはならんが、去りとして冷酷なる秋官が罪人に臨むが如く、些の同情もないといふ事は又人物の真相を捉ふる途ではない。科學の力の及ばない赤子の病の秘密をも、慈母の愛は獨りよく闡く事が出来る。全智全能の神は愛である。其人物に對する温かき

同情といふものが、又人物評家の要訣である。と同時に厳正な判断が必要である。厳正にして冷酷に失せず、同情あつて然かも之れに溺れないといふ事が、恐らく人物批評の最終の秘訣であらうと思ふ。これ人物評の愈困難なる所以である。

六

明治の文壇に於て人物評家は少くない。然し動もすれば観察が皮相に流れ、或は判断が冷酷に流れ、或は同情に溺れるものが比々皆然りである。曩きに鳥谷部春汀があつて人物評家として聲名を走せたが今や則ち亡い。而して近時

人物評家として知らるゝものゝ一人に鵜崎鷺城君がある。絢爛にして而かも奔放の筆と縦横の論評とは、此方面に於て雄に頭角を現はして居る。既に數種の人物評傳の著があつて世に歓迎されて居るが、今又新に「得意の人失意の人」を著はして世に問はんとするに當り、予に一言を求めた。すなはち人物評論に對する私見を述べて序に代へる。若しそれ予の見る當れりや否や、將た鷺城君の評論が予の見るに合せりや否やに至つては、敢て讀者の判断に任せる。

序

七

大正元年夏八月

白山御殿の山房に於て

樋口龍峽

八

序

「汝の本我を開發して得意の事を成せ」とは嘗てカーライルの激賞したモットーであるが、實をいへば本我の開發と得意の事を成すとの間には距離がある、數哩の距離で濟むこともあれば、數百哩の距離を接續せねばならぬ場合もある、或は天上人間消息の到底相通ぜざる程の距離のあることもある。

本我を開發することそれ自身が既に容易ではない。その本我が手を伸ばして得意の事を捉へんとすれば、往々にし

序

一

二
て猿猴の月となる、蓋し人間が本我と得意の事とを接続せしめんとするに至つて、どうも其處に一つの或る物があるやうである。或る物とは何ぞ、天人であらうか、果た悪魔であらうか、それはわからぬ、とにかく超人的なもので運命の支配者といふたらわかり易すからう。そしてその超人的の或る物は恒に喇叭のやうな管を口にして寄り来る人々の顔に息を吹きつけてゐる、その息には人を活かすの息と人を殺すの息とがある。苟しくも人を生かすの息に觸るれば、或は亞細亞歐羅巴を右にし亞米利加を左にして天下に向つて

大法螺を吹くの英雄となることも出来、或は本業のサーベルよりも副業の政治で成功し、位、人臣を極め、勲、人臣を極め、爵、人臣を極むることも出来、或は葡萄酒の飲み分けを誇りながら廊廟の上に翱翔することも出来れば、毛色の異つた妻君を懐にして群集の前で大聲叱呼することも出来る。毒箭の如き舌を以て觸るゝものを皆射殺すが、自分も亦その毒箭で射殺されるのもある。金を蓄めるに忙しくて、ついで子を蒔きそこねるものもある。若しそれ一度人を殺すの息を吹きかけらるれば、譬ひ如何に本我を開發しても、空谷

の幽蘭、深山の巨木到底世に知られずして終らねばならぬ。朝は天から明けて来る、夜は地から湧いて来る、一度運命の息で吹き上げらるれば、鮮やかな眞晝の空を飛ぶ飛行機のやうに萬目環視の中心點となる。之に反して運命の息に吹落されては、如何に開發せられた本我でも錦を着て夜行くが如しといふことになる、同じ本我でも、天に昇れば彗星となるものが、地に落つれば野の無名草となる、天に昇れば團々たる明月となるものが、地に落つれば浮きつ沈みつ浮草とその生涯を共にする海月となる、天に昇れば晝の王で

ある太陽となるものが、地に落つれば陰翳に閉されて光を保つに由なき鏡となる。カーライルは皇帝ジョセフがハンガリーの鐵冠を奪つたとき、その國民は月球に振蕩せられる大西洋の如く奮起したといふけれども、その冠は大きさでも價でも尋常一様の馬蹄鐵と差ちがひが無い、それが帝座に上つては鐵冠となり、それが街上に落ちては蹄鐵となるといふことが、地下三千尺の鑛脈中に安眠してゐた鐵の運命である、あゝ同じ鐵ではないか、運命が鐵を翻弄するの甚だしきを怪しむ勿れ、運命が人を翻弄するは更に之よりも甚だ

しきものがある。

事實といふものが恒に事實として價を人間に持つものではない、事實の外にこの事實を山のよりも大ならしめる作用があれば又之れを砂より小ならしむる作用がある、この作用が人間を天上に導くエンゼルともなり、或は地獄に落す妖術者ともなる、この作用とはよく群集心理に投ずるの作用でもあらう、時勢に鞭つゝの能力でもあらう。この作用は或は天賦の才氣を持つて起して來るものがある、或はその蓄積せる智囊を絞つて起して來るものがある、或は閥の力

に依り或は黄金の光に依つて起して來るものがある、或は眞醇の努力を頼んで起して來るものがある、之を要するに本我の開發と得意の事を成すとは必ずしも一つではない、苟しくも世に立つて得意の事を成さうと思へば運命に支配せられずして運命を支配するの用意がなくてはならぬ。普通の言葉で言へば我れを知り又彼れを知ることである。我れを知り世界を知ることである、我れは鐵である、世界は燧石である、我れの鐵と世界の燧石と相打つ所に成功の火が閃めく。然しながら運命に支配せられずして運命を支配す

入
ることとも亦本我の開発であるとすれば、無論さう言へぬことともあるまいが『とかく浮世は繼ならぬ』ものだ。

曩に『朝野の五大閥』を著はした鵜崎鷺城君はその一揮すれば風雲を巻き起す所の健筆を持つて更に『得意の人失意の人』を公にせらる、余は『朝野の五大閥』を一讀してこの人にして始めてこの著ありと讚嘆したる一人、眼に見ゆる七十二の黒子を描くのみならず、無くて七癖有つて四十八癖を描くのみならず、その系統を尋ね、その心事を穿ち、殆んど餘す所が無い、あゝ得意の人何ぞ限らん、失意の人何

ぞ限らん、得意の人失意の人その本我を開發するには皆全力を捧げたのであらう、然しながら運命の息は或は之を得意に吹き上げ、或は之を失意に吹き落す、得意必ずしも誇るに足らず、失意必ずしも悲しむに足らず、君見ずや、人間には得失是非の外に一個逍遙自適、樂天知命の世界がある。この世界は運命の支配者に對しては完全なる治外法權を持つて居る、世上幾多得意の人、幾多失意の人、この別世界に戸籍を有して居るもの知らず幾多ぞ。

大正元年八月 平等觀草堂に於て

華山 茅原廉太郎

鷺城兄足下

今の日本ほど馬鹿氣た社會は無い。洋行する人があると
すぐ其人を得意の人と云ふ、洋行から歸つた人とさへ云へ
ば徵兵避忌で倫敦で高等ゴロをして居た奴をもスグ尊敬し
て得意の人がらせる。尙それのみでない、權勢の人に對して
苦言諫言を呈して所謂得意の人に退一步の要訣を諷諫して
やる様なことは爪の垢程もなくして、只モウ得意權勢の人
を昇ぎ廻して益々得意がらせる、而して若し昇がれた本人
が一朝失脚する時には皆舌を出して笑ふ連中ばかりである。

二
驚城兄足下、僕は一年前には等徒輩の群居する馬鹿氣た
社會から（或は單に社かも知れぬ）辛じて脱走したが、足下
も亦近く此の手合を見限らるべしとの事である。「得意の人」
「失意の人」と云ふとは人々各々の見様であるが、哲人の心
には得意も失意もなからう。鼻眼鏡をかけた人、洋書を電車
内に開いて居る人、西伯利亞鐵道で露都まで小便をしに行
つて「此行五大洲を驚かした」などと出迎記者に嘯いて居
る人、新聞をバタ臭くするのが乃公の理想なりなど新部下
に宣言する人などは世の所謂「得意の人」かも知れぬ、され

ど理想の上に立つの我等は「得意」の別乾坤を開拓して所
謂得意、失意の外に超然たらずばなるまい。

予は足下を言論界の硬直なる先輩として尊敬するもので
ある。足下が新著成るの日所懐の一端を語る斯の如し。

青山にて

辱知 大庭 柯 公

自序

司馬法に天子意を得れば則ち愷歌して喜びを示すとあり、又史記の蘇秦傳に蘇秦齊の潛王を説きて宮室を高くし、園囿を大にし以て得意を明かにせしむとあり。上は帝王より下は凡民僕婢に至るまで事に成敗ある以上、人に得意失意のあるは勿論なれども、何處までを得意とし、又失意とすべきやは人の抱負の大小、境遇の異同にも因るべく一概に劃定し難し。晏子の御、大蓋を擁し駟馬に策ちて甚だ自得の風ありしも、御の妻は其志の小なるを嘲りて去るを求め

たるにあらずや。

二

世には猫額の如き小天地以外に男子功名を争ふの舞臺あるを知らず、少しく失意なれば他を嫉妬羨望するも、少しく地位を獲れば俄かに喜色を満面に浮べつゝ總てを自家のタイプに律し、二十人三十人の頭目となりて獨り自ら得意なる者あり。斯くの如き輩は一たび此窠臼を出づれば活社會に獨立獨行するに堪へず、忽ち不適者となり何等認められずして一生を終るに及ぶ。我輩は這般の小得意小失意の人物を笑はざらんと欲するも得ず。蓋し人の觀て得意とするも自らは失意なるあり、自ら揚々如たるも人の見て失意

とするあり。眞に適處を得て負ふ處の才を伸べ、學ぶ處を實際に行ひ、國家を経し民人を濟ふは何人も快とすべきなれど、得意の中に失意あり、失意の中に得意あり、眞に得意なるは少く、遇不遇は天なりと諦めて境遇の上に超脱し、別に安心立命の地を求むれば、不遇なりとて何の憂ふる處あらん。

篇中の人物二十五人、孰れが得意にして孰れが失意なるか、評者の觀る處必ずしも被評者と一ならず、第三者亦各見解を異にするなきを保せじ。されど多くは問題の人を捉へ、著名なる事件を背景として忌憚なく品隲を加へたれ

ば、名は人物評論なるも、一種の時代史論と見て差支へな
かるべし。

四

大正元年八月一日夜迅雷の音を聞きつゝ、
青山の莫哀居に於て認む

鷺城學人

凡例

- 一 本書に收むる人物論は最近『日本及日本人』『中央公論』『新公論』及び舊
進歩黨非改革派の機關雜誌『進歩』に掲載したるもの大部分を占め、曾て新
聞紙に掲げたるを骨子として改竄補綴したるもの數種あり、稿を新たにし
たるは『戸水寛人と寺尾亨』『快男兒西本國之輔』の二篇のみ。
- 一 既に歴史の人となれる堀田、河島、鳩山の三人を特に加へたるは、最近
の政治問題に關係あるを以て之を割愛するに忍びざればなり。
- 一 内相としての原敬、遞相としての後藤新平は前著『朝野の五大閣』中に
論じたれど、本篇には或る特殊の問題の主人公として、若くは別箇の方面
より論評を下したり。前論と併せ讀まば一層二者の人物を明かにするを得

凡例

一

一 江木博士は特に題詩を輕井澤より寄せ、友人古島、相島兩代議士、樋口龍
 峽、茅原華山、大庭柯公君亦た各々著者の爲めに一文を草す。是等は接手順に
 依て排列せり、深く六氏の厚情を謝す。

目次

一	選舉案に敗れし原内相	一
二	寺内正毅論	一九
三	上原陸相論	二八
四	左遷されたる上泉少將	四四
五	市長としての阪谷男	五八
六	最近の大隈伯	六九
七	死處を失ひたる二名士	七六
八	未成品後藤新平	八三
九	秋元興朝子	九三

得意の人 失意の人

十 堀田正養子……………一〇三

十一 河島盤谷……………一〇九

十二 鳩山和夫……………一一二

十三 社會道德の破壊者……………一一八

十四 長人中の非長人……………一二四

十五 戸水寛人と寺尾亨……………一四六

十六 東京市會の三人男……………一五四

十七 投機界のハレ彗星……………一六三

十八 細野次郎……………一七二

十九 快男子西本國之輔……………一七六

二十 袁世凱及び其幕僚……………一八四

二

廿一	朝鮮の大立者……………	二〇三
廿二	樂界の三天才……………	二一五
廿三	政治的婦人……………	二二〇
廿四	川上貞奴……………	二三四

得意の人 〓 失意の人

四

目次終

人物 評論 得意の人 〓 失意の人

鷺城學人

選舉案に敗れし原内相



第二十八議會ぎくわいに提出したる政府せいふの諸案しよあん概して重要視じゆうようしすべきもの少く、随つて政府も議會も唯だ尋常一様の質疑しつぎ應答おうたふを重ね形式的に議了ぎりやうしたるに過ぎず。議員側ていあんの提案ていあんは幾ど百餘の多きに及べども、其法律案そくに屬するは政府案せいふあんに比

選舉案に敗れし原内相

一

して一層價值なきもの多く、殊に建議に屬するものに至ては世に所謂のお土産案にして、其目的一に選挙區の歡心を獲るにある以上、國民全般の利福と没交渉にして、之を大にしては一縣一郡、之を小にしては一市一村のことに關するのみ。就中鐵道案は概ね政府黨の議員に依て提出せられ、事の理否、實行の難易、財源の有無を問はずして漫然多數を恃みて可決し去れり。憲法上議會に與へられたる權利の一として本來有効に使用すべき筈なる建議其物の價值爲めに低下し、殆ど名ありて實なきに至らしめたるの罪は政府黨議員自ら之を負はざるべからず。去れど政府にして選挙法改正案を提出せざりしならば、豫算案通過後の議會は殆んど書生の擬國會と相選ばざりしならんも、一の選挙案ありしの故を以て兎も角も掉尾一振の觀をなし、朝野の視聽をして何程か之に傾倒せしめたり。蓋し該案は衆議院議員各自の痛切に利害を感

ずる問題なるのみならず、將來憲政の發達及び既成政黨の消長に淺からざる關係を有すればなり。

選挙法改正案の骨子は言ふまでもなく小選挙區制にして別表の如きは從屬の問題に過ぎず。之にして否決し去られんか、乃ち改正の意義を失ひ政府の志望は全然水泡に歸すべし。前年同一の内閣、而も同一の大臣に依て提出されたる郡制案は地方制度の改正に止まるも、選挙法案は憲法附屬の法律として且つ樞密院にまでも附議したるものなれば、前者に比して遙に重大なるに相違なし。去れど西園寺内閣の運命を賭して争ひたる問題にあらず、且つ本來衆議院に屬する事柄にして、縦令貴族院の之を否決するも、今後連續して提出すべき性質のものなれば直接國政に影響せず。唯だ政府の面目は之が爲めに多少傷き、殊に當面の責任者たる原内相の輕重を問はれたるの結果とな

る。言ひ換ふれば小選挙區制の否決は原に對する一種の不信任を意味し、原の貴族院に於ける政治的立場の依然として困難なると、第二には貴族院に蟠屈する官僚系の西園寺内閣に對する心理状態を機微の間に察知すべきにあらずや。

二

西園寺内閣に於ける原敬の位置は桂内閣に於ける平田東助の位置に比して更に重く、即ち參謀長にして副總理大臣を兼ねたる形あり。藏相山本達雄といひ、遞相林董といひ、農相牧野伸顯といひ、法相松田正久といひ、文相長谷場純孝といひ、雷に世間の原に及ばざる遠しとするのみならず、彼等自らも一目を置き、敢て楯突くの勇氣なきが如し。殊に外相内田康哉の如きは曾て奥國大使たりし當時、古河家の金を以て歐米漫遊を試みたる原を維也納に

招致し、日夕宴を張りて美酒佳肴に饜かしめ、或は連夜紅樓春閣に伴うて奥都第一の美人を擁せしめたるなど款待到らざるなかりしを以て、原は歡喜措く處を知らざりき。乃ち第二次西園寺内閣の組織に際し、園中堂の意或ひは本野一郎を外務大臣たらしむるに在りたるらしきも、原の極力内田の爲めに推薦の勞を執りて之を翻したる、獨り陸奥同門の舊誼に因るのみならず、又康哉曩日の好情に報いんが爲めなるなからんや。斯くの如き關係あるを以て内田は努めて原の使令に服する義理あり。無論原の諸相に於ける態度は政友會の有象無象に對するが如く露骨ならざるも、其胸中を窺へば與し易く御し易しと見透れるならん。獨り侯井上と首相西園寺に對しては流石の原も頭の擧がらず、蓋し井上は彼が徹々たる一新聞記者より一代の運命を開拓したる最初の「バトロン」にして、今日も尙間接の守護神たるに似たり。西園寺と原

とは始めより密接の關係ありしにあらざれども、井上既に引退し、伊藤、陸奥の俱に館を捐てたる以上、勢ひ西園寺に附攀せざるべからず。彼れ如何に敏手辣腕なりと雖も未だ能く一人の力を以てして今日あるを期し難し。畢竟西園寺を頭領に戴くが故に閣内に於ても政友會に於ても幅を利かし、多少仕事も爲し得らるゝ譯にて、他日はいざ知らず當分の處は後生大事に西園寺の袖に絶るの必要あらん。

原の政治的系統は清浦、平田、大浦、小松原等の山縣若くは桂に於けるが如く終始一貫せるにあらずして謂はゞ不定なり。不定といふよりも寧ろ轉換的にして恰も鳥の喬木を趁うて遷るが如し。司法省法學校の賄征伐に連坐して半途退學するや、非藩閥黨の機關たる郵便報知新聞に入りて矢野文雄に事へ、間もなく故渡邊洪基の配下に屬し、亞で井上の知を受け、井上より陸奥

に、陸奥より伊藤に、伊藤より西園寺に行けり。尤も矢野を除くの外は人を異にするのみにして系統略ぼ一なるかに見ゆるも、彼が時の權勢に結ぶの巧みなるを知るべし。而して原の位置の日に就り月に將む所以のものは此權勢を利用したるに職由し、同時に國士の人格を缺く所以のものも亦焉んぞ權勢に役せらるゝにあらざる無きを知らんや。

三

政友會の幹部は分ちて三階級とすべし。第一は毎年總裁の指名を以て改選せらるゝ幹事長以下幹事の一團にして、名は幹部といふも實は高級事務員に過ぎず。第二は長谷場、大岡、元田、尾崎、杉田の如き虛名と故參とを以て雜輩の間に多少重きを成す所謂の自稱領袖の一連なり。第三は奥の院の三尊と稱せらるゝ西園寺、原、松田にして、黨全體の支配權も高等黨略の決定も

此三人に限らる。然れども西園寺は國政に冷淡なるが如く黨務に對しても極めて不熱心にして、唯だ毎年一回大會に出席して活版刷的の訓示を試むるに止まり、實際は原、松田に統治權を委任せるの狀なからず。表面の見を以てすれば、原の權力最も黨中に伸び、二百餘名の議員舉げて歸順せるが如きも、事の實際をいへば多衆は原を喜ばずして松田に推服し、原を憚ぶ者も松田を敵とせずして同時に心腹せり。概して智略才幹餘りある者は動もすれば自から待みて自己以外の者を觀ること愚者の如く、寧ろ之を威壓して己の力に據らしめんとするの弊に陥る。原の如きは即ち此類型の人物なり。今の朝野の政治家中には世間の人氣如何に喜憂を挾む者と、始めより人望不人望を眼中に置かずして自我の信念に依て行動する者とあり。想ふに大隈、桂、大石等は前者を代表し、犬養、原は即ち後者に類するなきか。原の無愛嬌と

執拗は元と天質にして苟くも他の歡心を釣るが如き所爲絶えてあるなく、殊に陣笠議員の言議に對しては天邊下ろしに撃退するを常とす。最近某新聞に彼の事を評して、前年大阪東京間を往復したる際、汽車中豫て囑目する處の紳士に會すれば菓子箱を出して一個を侑め、更に巧言令色して漸次自家藥籠中に收む云々の文字ありたれど、斯くの如きは原の人と爲りを知らざる者に於て恰も別人を説くの觀あり。凡そ政黨領袖の黨員に接する自己の聰明を没して衆愚と調子を合はし、自ら少く語りて彼等に多く語らしめ、常に聽者の位置に立つを必要とし、然らざれば歸服せず。原は此呼吸を解せざるもの、固より其不利なるを知らざるにあらざるも敢て之を憂へず、憂へざるが故に努めざるなり。

世間或ひは原を以て第二の星を氣取る者となせども兩者の人物行實の上に

は甚しき逕庭あり。眞個彼にさる意志のありて星の云爲に倣ふとせば、是れ所謂虎を描きて猫に類する者なり。唯だ何程か似たりとせば剛復自ら用ゐる毀譽褒貶に頓着せざる點にあらん。星は清教徒的の眼より公益として目せられたれど、其獲る所の財は私腹を肥すが爲めにあらずして之を散せんが爲めなりき。故に目的の爲めに手段を擇ばざるの不徳を攻撃する者ありしと同時に、其恩に感激して彼の爲めに一死を惜まざる者も尠からざりき。原の財に於ける案外に潔白なり。第一次西園寺内閣の内務大臣たりし時、電車市營運動者の手より賄賂的に巨額の金を握れりと唄はれ、近者また大阪遊廓移轉問題を利用して百萬金を贏ち總選舉の運動費に充てんとすと傳へらるゝも、是れ恐らく彼を譏誣する者の言なるべし。芝公園の自邸は通商局長時代に建てたるもの、其粗造狹隘にして室内一の粧飾品なく、大阪在住時代に某書家に

囑して揮毫せしめたる拙畫の一軸を今も尙床間に懸くるのみ。斯かるは彼の無趣味なるにも因れど、贅澤なる生活を營むの餘裕なき證左とせずや。尤も今日に至るまで或ひは大阪に出稼ぎし、或ひは古河の番頭にもなりたれば、野に下りて浪人となるも衣食の資に窮せず、選舉場裏に立つも運動費に差支へざる丈の用意はあるべし。若し彼にして星の如く大に取て大に散すれば自然に乾兒を製造し得べきも、大に取る程に大膽ならず、取らざるが故に散するの金なく、散せざるが故に徳とする者なきのみ。故陸奥福堂は感情よりも理性の勝てる人物なりしが、金錢を與へ職業の世話を爲さるべからざるが如き者は事を與にするに足らず、卻て足手纏となるべし。又余は自ら足を駐め首を回らして一町後より來る者を待たず、俱に行かんとする者は我背後より跟随し來るべしとて、自ら手を下して乾兒を造らざりき。原は陸奥の流

儀を學んで自ら賢しとする者にあらざるか。岡崎邦輔は陸奥時代より原と親交あり。殊に古河との關係上原とは離るべからざるに拘らず、近年兩者の間輯睦を缺けるの状あるは何ぞや。蓋し原は星が關東派の上に立ちて縦横無盡に活躍したると異り、或る纏りたる勢力の己れに無きを自覺せるより、寧ろ他の力を利用するの傾あり。然るに岡崎は機略縦横の策士にして一個人としては黨中稀れに見る處なれども、殆んど孤立にして政治的地盤なく、之に反して奥繁三郎、伊藤大八の屬は其人物の俗惡陋劣なる唾棄すべしと雖も、兎も角も或る團體を動すだけの力を有せり。是れ原が奥繁、大八を近けて岡崎を重んぜず、隨て岡崎の原に對する感情曇日の如くならざる所以なるらし。政友會に於て原の嫌忌せらるゝは嶮峻攀づべからず、夏日畏るべしの形あればなり。之に反して心を松田に傾くるは猶冬日の愛すべきに似たればなり。

故に或る問題の爲め代議士會の紛擾鼎の沸くが如く、原の一喝も寸効なきの時、松田のオホンの一咳と不得要領の一言とは倏忽にして鎮撫するの不可思議力を有す。孟子の所謂る力を以て人を服する者は心服するにあらず、力足らざればなり。徳を以て人を服する者は中心に悦んで服すとは原と松田の政友會に於ける實狀を説明して餘りあらずや。

然れども政友會は二者其一を缺く能はず。松田は器度大なるも事に敏ならず、決斷力と勇氣を缺く、此三點は松田の原に及ばざる所以なり。是を以て松田をして黨内の融和抱合に當らしめ、一面原をして黨を運用し政戦を開かしめて初めて政友會の機能を全からしむるを得べし。乃ち西園寺は能く二人者の長短を知悉するが故に松田を敬して原を用ゐ、内に向ひては前者に信頼し、外に對しては後者の力量を發揮せしむるが如し。

四
政友會が政權を取りて日尙淺きに係らず、何を以て原は選舉法改正案を提出したるか。是れ當に政府以外の者の解するに苦めるのみならず、政友會内にも疑問とする者多し、或ひは曰く、財政に對する論難の鋒先を避くるの敵本主義より總ての注意を此問題に集中せしめたるなりと。斯かるは餘りに穿ち過ぎたる説にして真相に觸れず。我輩の觀る所を以てすれば、三個の動機に出づるらし。内閣の壽命長からざるの明かなる以上、原の立場として今回は何事をか企てざるべからず。前後二回とも無爲の内務尙書に終るは功名心の熾んなる彼の忍ぶ能はざる所なり、是れ其一。郡制案以來貴族院の原に對する感情は如何に變化せるか、波紋の大小、水の深淺を測り知るが爲めに石を池中に投じたるなり、是れ其二。政黨の地盤を擁護せんと欲せば小選舉區

制に改むるに如くなく、萬一兩院を通過するを得ば政友會の勢力を扶植するを得べしといふ黨略をも加味せり、是れ其三なり。

小選舉區に就ては衆議院の各派各人利害を異にするを以て政友會にも可否の論一ならず。若し黨議を以てせずして自由問題とせば、恐らく反對者多かりしやも測られず。國民黨とても亦然り。唯だ政友會は自黨の政府の提案なるを以て面目上賛成し、國民黨は單に黨略上より反對したるまでのみ。然れども貴族院の觀る處は自ら異り、政黨嫌ひなるは小選舉區の設定を以て一に政友會の爲めにするものなりと思惟し、現に一部の策士は穂積八束をして衆議院は政黨の事務所にあらずとの曲學的議論を唱へしめて保守主義者の反對熱を煽揚したる氣味もあるらし、大浦一輩は桂黨を樹つるに人を目的として集め、之が爲めに年月と金錢の多くを費したるも、事志と違ひたれば、此兩

三年來些か手古摺り、結局地盤を造るの必要を自覺して其準備中にあり。然るに今直ちに小選挙区とならば中央黨破滅の基となるなり。又桂にしては自ら政黨の首領たるを欲せず、政黨操縦を以て畢生の目的とし、政黨を操縦するには小選挙区よりも大選区區を使つること、故伊藤が此目的の爲め大選区區を利用したるに徴して明かなり。官僚系の意圖斯くの如くなる以上、貴族院に敗るゝは必然の數にして、實は内務省調査委員會に於て貴族院側委員の悉く反對したる時、既に該案の運命は決せるなり。而も尙萬一を僥倖したりとせば原も案外思ひ切りの悪き男と謂ふべし。前年郡制案を提げて桂系に挑戦し、貴族院を縦断せんとしたるも一敗地に塗れ、其贏ち得たるものは彼に對する反感のみ。而も此反感は一種の病的性質を帯び、原の顔を見れば癩に障り、原の案としいへば反對したくなる位なり。殊に政友會に於て恣に別

表の修正を行ひたるの一事は益々原に對する反情を激成したるが如し。

由來原は局量狭小にして睚眦の怨も尙之を報ゆるの性質なるが、殊に選挙案に對する態度の如き甚だ不感服なるものあり。彼は衆議院の多數を恃むの餘り、本會議に於ても委員會に於ても其答辯の徹頭徹尾喧嘩腰にして眇たる陣笠議員とまで争ひ、毫も大臣の貫目と誠意とを認めざるに反し、一たび貴族院に臨むや曩に脱兎の如きもの忽ち處女の如く變じ、鞠躬如として恭謙を装へり。斯かるは士君子の爲すを恥づる處にして俗吏の本性を暴露したるものにあらずや。原の官僚系に忌まるゝは猶大浦、後藤の西園寺黨に嫌はるゝが如く、而して大浦と後藤の正敵は原にして、原の正敵も亦此二人者なり。選挙法改正問題は貴族院と衆議院の係争にあらずして官僚黨と政友會の争ひなり。換言すれば大浦、後藤と原の争ひなり。今や大浦、後藤等の食指大に

動き、二たび政權を奪回せんとするの意歴々たるのみならず、來る豫算編制期に入らば、政府は内財政に行詰り、外官僚派の迫害に堪へずして瓦解の運命を見んも知るべからず。桂の二たび起つか、寺内の出づるか、事の逆賭し難きは猶政友會が官僚派と眞劍に戦ふの勇氣ありや否やの豫測し難きと同じ。鼻ツ柱の強き原は愈々のドタンバに迫らば民黨聯合を策して大に闘ふの覺悟ありといふ者あれど、今日までの行實に徴すればさる膽識ありとも思はれず彼の意を忖度するに眞の政黨政治を現出する爲め進んで難きに就くべきか、若くは不名譽を忍ぶも今暫く易きを選んで藩閥と交綏すべきかの岐路に迷ひ確固たる信念なきに似たり。而してたゞなり、後藤なり、犬養なり、大石なり各々見地こそ異なれ、國際的競争の上に立てる日本の國策を如何にすべきかに想到せるも、原は久しく外交家たりしに似ず、國策上の經綸に乏しく、其

眼孔の範圍は常に國內的にして、謂はゞ内務一省の問題に限らるゝの觀なからず、是れ經世家として彼の價值幾何なるや、大いに疑ひなき能はざる所以なり。

寺内正毅論

今の官僚政治家中桂に亞いで威權赫々たるは朝鮮總督大將伯爵寺内正毅とす。彼は政治家として最も後輩の一人なるのみならず、軍人としても佐久間長谷川、乃木、大島、奥、黒木等の諸將に比すれば遙かに後進に屬し、西南の役より日清戦争前後までは纔かに今の故參中將と同格若くは其以下に在り

しに過ぎず。然るに彼の著々として位置を進め、桂に代りて軍部の實權を掌握して以來、帝國軍人の首根ツ子を抑へて一人の能く抗敵すべきなく、幾多の宿將をして彼の節度を仰ぐの已むを得ざるに至らしめたるは何ぞや。

蓋し第一の原因は彼が純長人たるにあり、第二は陸軍の羅馬法王にして長州三尊の一人たる山縣有朋の後援と、山縣の後繼者を以て自ら許せる桂太郎の推輓庇護を得たるにあり。第三は長閑の宿將中比較的能力を有するにあり。言ひ換ふれば寺内の偉きにあらずして概して他の偉からざるが爲めのみ。然らば則ち彼は獨自一己の力を以て自から運命を開拓したるにあらずして、多くは他力を以て今日あるを致し、なり。彼も亦一世の倖運兒とせずや。

維新前山口藩に御楯隊なるものあり。是れ故山田顯義、品川彌二郎の統率せるものにして、高杉晋作の奇兵隊と共に今日の長閑陸軍を形造りたるそも

そもの土臺となす。寺内は弱冠にして御楯隊に入り討幕の軍に従ふ。時に隊の傳令使たり。其初めて明治陸軍に入りし時は官纒に軍曹に過ぎず。漸く明治四年を以て少尉に進み、西南の變、大尉を以て近衛第一中隊を率ゐ、田原坂の激戦に於て右手を傷け、高瀬病院に療養して田原坂以後の戦闘に加はらざりき。其後第一回は佛國公使館附武官として、第二回は軍事視察として、第三回は英國皇帝戴冠式參列員として前後三回外國に赴き、日清役には大佐を以て運輸通信長官に任せられ、戦争中少將に進みたり。彼が教育總監となりしは三十一年歩兵第三旅團長を罷め歐洲より歸朝し、後にあり。當時薩摩の勢力尙ほ旺盛にして長人は南風競はず、今日の如く我儘勝手の振舞を爲す能はざりき、彼は暫く總監の閑職を守りて薩人の下に雌伏し、翌年參謀本部に入りて之が次長たりき。當時高島鞆之助は陸軍省に虎視し、川上操六は參

謀本部に鷹揚して軍部の勢力を二分し互ひに其一を保てり。川上は薩閩の出を以てして毫も藩閩魂性に囚はれず、信州の福島安正、甲州の田村怡興、仙臺の黒澤源二郎、静岡の井口省吾、南部の東條英教、其他の人材を各方面より羅致して隠然長閑の爲めに一敵國をなし、何者も彼の勢力を左右する能はざりき。寺内の參謀本部に在るや軍人としての智識の貧弱なるを表明し、且つ傲慢不遜なる態度は忽ち部内の反感を招き、終に川上系の反抗同盟に逢ひて參謀本部を去るの餘儀なきに及ぶ。然れども時勢一變、高島先づ失脚し、川上は館を捐て、川上の後繼者として満天下の矚望せし田村も逝き、薩派軍人は源氏の爲めに窘逐せられし平家の如く勢ひを失して軍部の權全く長人の手に歸するや、寺内は漸次三角頭を擡げ來れり。

薩人失勢後の第一の陸軍大臣は桂にして、亞で兒玉源太郎之に代り、寺内

は三代將軍たり。彼れ陸相の印を帶ぶるや、第一に畫策したるものは異系を驅逐し、長人にあらざれば軍人にあらざるの實を擧げんとしたることは是れにして、先づ鹽谷方國、柴野義孝等二十餘名の石川組を一時に血祭に供し、川上系を風殺的に滅り、其他寺内の爲めに萬斛の痛恨を飲んで軍部を去り、若くは不遇の境に陥りたる者少からず、異邦人にして辛うじて首を繋げる者は節を折て長人に降服したる腰拔武士のみ。斯くの如くして寺内は陸軍省も參謀本部も長人の掌中に收め異邦人をして一指を染むる能はざらしむ。川上に於て參謀本部に頑張る以上は今日の如く暴横を極むる能はず。又兒玉は彼の縁戚にして彼を陸相に推薦したる一人なれども、若し生存せば寺内も何程か遠慮もし制肘もせられ、到底目に餘る振舞をなす能はず、故に此二者の死は適く彼の爲めに勿怪の幸ひとなれる形あり。兒玉は川上類型の人物にして智

略絶倫の稱あると共に、武人に珍らしき政治的才幹を備へ、長人の出を以てして長閑に偏せず、嘗て臺灣總督たりし時前科者の後藤新平を抜て民政長官の重職に用ゐたるが如き其一例にして、其器の大小豈に寺内と同一に見るべけんや。

今の時最も多く舉國一致を口にする者は閩族政治家なり。而して舉國一致の精神を破る者も亦閩族者流にあらずや。蓋し彼等は藩閩の勢力を維持せんが爲めには如何なる非違も敢て之を避けず、同郷同藩者は極力之を擁護するも夫れ以外の者を見ること恰も敵人の如く、公器を私し名爵を私黨に授けて恬然憚らず。彼等の廟堂に立つ誠心誠意を以て至尊を輔弼し、國民全般の爲めに善政を施すにあらずして、眼中唯だ閩族の利害あるのみ。斯くの如きは至尊に對して不忠なると同時に黔首を愚にするの甚しき者、國民共同の怨敵と

して一日も宥し置くべきにあらず。今や長人の勢ひ旺んなれども、斯かるは其絶頂にして、恰も燈火の將に滅せんとする前暫く明かなるが如く、滅亡の機運の近きに迫れるを見る。而して山縣なり、井上なり、桂なりは國民怨敵の頭目にして多年尊閩思想を馴致したる者、之に附隨するの輩亦皆其思想を繼承せるが、就中長人萬能主義の權化ともいふべきは寺内にして、武斷政治を最も露骨に行ひ、眼中憲法も民意もなく、自己の政策の爲めには如何なる亂暴をも辭せず、恰も政治を以て戦争と同一視し、國民を視ること恰も敵人の如く、輿論を代表する政黨及び新聞紙を以て凶器の如く心得るに似たり。最近彼の朝鮮に於ける遣口を見るに、恰も軍司令官として敵國に臨むの觀なからず。日韓併合に先ち八道の津々浦々に多數の憲兵を配備し、新聞紙に對して亂暴なる壓迫を加へ、時局の解決に必要な若くは不必要なる道具立を

事細かに且祕密に準備して咄嗟に之を行ひたる、恰も開戦に先ちて作戰計畫を立て、然る後ら砲火を開きたると同一筆法にして、何ぞ其大業にして且つ馬鹿念の入りたるや。蓋し彼は周陽、趙高、寧成等古の支那の酷吏の爲したる所を以て政道を得たりとし、或ひは專制國の暗黒政治を以て理想的の如く解する舊式政治家なり。是を以て彼の總督として日鮮人に臨む所を觀るに、或ひは會社令、辯護士規則、警察即決例の如き暴令を發し、徒に嚴酷苛察に失して其治狼の羊を牧するが如く、己れの爲め利なる者は法を撓めて之を活かし、憎む所の者は法を曲げて之を誅滅せずんば已まず。是を以て朝鮮に在て生命財産の安固を保たんとせば滿幅の痛憤を忍んで總督の虐政に堪へざるべからず。尹致昊、梁起鐸等を首領とせる鮮人百餘名が寺内を京義沿線の各驛に要して三たび暗殺せんとしたる、其主なる動機の排日思想より來る併合反

對にありて彼等の暴舉は惡むに餘りあれど、一面に於ては總督の不徳なる未だ八道の民心を收攬し得ざればなり。彼を以て憲政の惡魔或ひは暴政家といへば如何にも膽略あるかの如くなれど、實は細心小膽の重箱楊子家にして、桂の老獪にして巧慧なるに比すれば案外の正直者とす。日露戰爭の鹵獲品及び營口稅署の收入は當然國家の收入に屬すべき性質のものなるに、陸軍省の終に之が決算報告を爲さざるは久しく世人の疑訝する處、寺内の廉直なるさる忌はしき振舞なきを信するも、惡く想像せば彼を圍繞せる者の腹を肥し、或ひは日韓併合の當時兩班及び新聞買收等の機密費に充てたりといひ得べく、孰れにしても曖昧に附し去りたる責任は免れず。

次の内閣を組織する者は桂か、寺内か、三たび桂の出づべしとも想はれ、順序よりいへば寺内ならんとも思惟されざるにあらず。去れど十人の八人ま

では桂を以て西園寺に代る者とし、現に外國に於ても爾く觀測せらるし。蓋し寺内の如き頭を以てせば勢ひ藩閥力を亂用し、却て長閑の運命を短縮するの危険なからず、山縣も桂も之を知るが故に、彼をして臺鼎を料理せしむるを欲せざるものゝ如し。蓋し寺内は何程か軍政の能あらんも、宰相の器にあらず、若し彼にさる野心あらば己を知らざるの甚しきものなり。

上原陸相論

上

現内閣は首相西園寺を始め内相原敬といひ、法相松田正久といひ皆な佛學

派に屬し、其人物の輕快にして思想の何程カリベラルなる、之を前内閣の桂、平田、後藤、小松原等の徹頭徹尾官僚式にして窮屈なるに比すれば、後者の概して獨逸趣味多きに反し、前者の佛蘭西的色彩を帶ぶる處に對照の妙を認むべし。殊に治外法權の位置にありと稱せらるゝ陸軍大臣までも前には獨逸派といふよりも佛派に近き石本新六あり、今亦た佛派の錚々たる中將上原勇作の其後を承けたるが如き、偶然とはいへ奇と謂はざるべからず。

上原の新任に就ては恰も軍部に於ける一種の福音の如く、知ると知らざるを問はず一齊に之を歓迎せるの狀は、往年高島鞆之助が第四師團長より陸相の印綬を帯びて世上の人氣を一身に集めたる時にも過ぎたり。斯るは上原の人物手腕を認むるが爲めなること勿論なれども、半面の理由としては何程か感情も加味せざるにあらず。輓近薩の凋衰し長の勢ひ大に軍部に張れるは

隠れもなき事實なれば、人情強者を憎み弱者を憐れむに傾くこと、猶ほ政友會の横暴を鳴らして一方國民黨の逆境に同情を寄するもの多きと其投を一にす。上原にして長閑の出若くは長閑の系統ならんか、其陸相たるは當然の事として特に側目驚異する者なかるべきも、適く薩閥より入りしが故に反抗心と同情と相錯綜せる一種の心理作用を起して上原を謳歌せる結果となるのみ。今上原を論ずるに先ち順序として聊か陸軍に於ける薩閥尖勢の由て來る處を叙せざるべからず。

征韓論の破裂より西郷南洲を中心としたる多數有力の軍人は相率ゐて野に下り、續いて西南の亂に殆んど戦歿したるも、尙大山巖、野津道貫、黒田清隆、高島鞆之助、川上操六等ありて先人の扶植したる地盤を守り、一時は陸軍の要路を悉く薩人の手に收めて其勢ひを鳴張したる、恰も今日長の薩に對

すると同一の實情にありたれば、長の武人は切齒憤懣して竊に非薩同盟を策したるも、計破れて薩人の反感を買ひ、狡獪なる桂の如きは中途同盟より脱し、三浦梧樓、鳥尾小彌太等は最後まで志を渝へざりし爲め終に失脚するの餘儀なきに至れり。斯くの如くにして明治十八年内閣制度實施の時より日清戦争後三四年に至るまで陸軍大臣の椅子は薩人の手に歸したるも、政治上の失敗に加ふるに宿將相亞で館を捐てたれば、長人は之に乗じて著々勢力を奪回し、二者の位置全く顛倒するに至れり。殊に川上操六を失ひしの一事は薩に取りて打撃の最も甚しきものとす。山縣といへども川上を憚りて一指を染むる能はざりき。況んや桂、寺内、長谷川の屬に於てをや。後年彼等が川上系を軍部より一掃するの策に出でしは復讐の意に外ならずと稱せらる。其他間接直接の原因を數ふれば多々あるべきも、禍の根本は自ら別に存するも

の如く、其根本の原因と部分的の原因と相合して今日の衰運を馴致したるもの、即ち其主因は當然爲すべきを爲さざりし罪に歸するの外なし。

何をか爲さざりし罪かといへば、軍部の先輩の冷淡なる後進の養成を懈りたると、松方侯の如きは薩人の最も不得手たる殖産興業を奨励して郷藩の子弟を之に嚮はしめたるより軍人を志望する者歳と共に減少し、後繼者を出すの途を杜塞したる結果となれり。之に反して長閑の先輩は長く陸軍に於ける權勢を保護するの根本主義より別に基本金を積み、長防二州の子弟をして一人にても多く軍人たらしむるの方法を講じ、又後進の面倒を見れば獨り將官に於てのみならず、佐尉官を通じて尙多くの員數を占むるも、薩は佐官以下に至らば殆んど絶無にして稀れに見るのみ。最近大佐より少將に進級したる町田經宇を以て恐らく最後の一人なるべしと稱せらるゝが如きは心細き

次第にあらずや。故に公平に論ずれば長の陸軍に伸ぶるは伸びざるべからざる理由あるも、薩の勢を失ひたるは止むを得ざる自然の數と謂はざるべからず。

中

上原は薩の支封にして百二都城の一なる日向都の城に生る。本姓は長岡夙に出で、上原家に養はれ、十二三歳の交を以て鹿兒島造士館に入りしも、上原の念止み難く學業を卒ふるに至らずして東京に出で、郷人某の紹介を以て故野津道貫の家に寄食す。當時齡ひ纔に十八、玄關番、庭掃除を日課とし、時には有名なる野津の肝癪に觸れて鐵拳を喰ふことありしも、克己忍耐して忠實に事へ、暇あれば書籍に親しみたれば野津も彼の篤學を愛し外國語學校に通學せしむ。當時誰か上原を以て異日帝國の軍政を主宰すべき大立者たるべ

しと豫想せんや。彼の志軍人となるにありしを以て間もなく語學校より陸軍幼年學校に轉じ、二年の後ちを以て陸軍士官學校に入る。中將木越安綱、楠瀬幸彦、秋山好古等と級を同うし、成績一級に冠たりしを以て時の生徒隊長たりし寺内は此時より彼の前途に矚目したり。西南戦争は在學中の出來事なりしを以て戦線に立つを得ず、唯だ西の方郷國を蔽ふ戦雲を望みて徒に腕を扼するのみ。十二年業を卒ふるや直ちに工兵少尉に任せられ東京鎮臺にあること二年、時に第一期生の俊秀なる者を簡拔して歐航せしむるに當り、上原も其選に入りたれば、四年間佛國に留學して専ら工科の學を修め、歸朝後暫く士官學校に教鞭を執り、或は東京灣砲臺建築のことに執掌し、二十二年中將小澤武雄に従ひて再度の洋行をなせり。既にして日清戦を交ふるや、彼は初一戦より最後まで第一軍の帷幕に參し、平和克復の翌年特派大使に扈從し

て露帝戴冠式に參列したり。是れより先き彼は川上の信愛する處となり其露國行の如きも主として川上の推薦に出でしが、歸朝後參謀本部に入り久しく第三部長を以て第四部長を兼ね川上の軍事計畫を佐けたり。露國皇帝の主唱を以て萬國平和會議を海牙に開くや、駐英の林董駐佛の本野一郎は我邦の代表者として參列したるも、會議の問題は主として軍事に關したれば陸海軍よりも參列員を派するの必要ありとし、當局者は其人選に苦心したる末上原を陸軍の代表者たらしめたり。蓋し彼は再三再四歐洲に航して其形勢に暢曉するのみならず、佛語の造詣も深く加ふるに頭腦明敏にして材幹の傑出するあり、川上は一に彼を以て此使命を托するに足るとしたればなり。果して平和會議に於ける彼の働き振りは水際立ち、川上の鑑藻に背かざるの實を示したり。其後工兵監として又砲工學校長として特科隊の爲めに貢獻せるは軍部の

認むる處、就中工兵の演習を從來の小規模より今日の大規模に進めたるは其最も著大なるものとす。蓋し各兵監は團隊長より何程か尊敬を拂はるゝも、謂はゞ陪臣の閑職に外ならざれば、概ね陸軍省に頭の擧がらざる有様にして其管掌内の豫算の如きも當がい扶持を受くるに過ぎず。然も上原の工兵監となるや卑屈盲従に陥らずして軍務局長を説破し、陸軍省をして計畫を實行するに必要なる經費を支出せしめたり。斯くの如きは是まで繼兒扱ひされたる工兵科の爲めに氣を吐きたるものと謂ふべし。

上原が軍人として手腕を實際に發揮したるは日露戦争の時にあり。當時の參謀長は第一軍の藤井茂太といひ、第二軍の落合豊三郎といひ、第四軍の伊地知幸介といひ皆な特科の出身なるが、第三軍の上原も亦工科に屬したるを以て日露戦争は恰も特科將校の智慧くらべとも云ふべき程なりき。殊に第三

軍司令官は外父野津なりしを以て單に私情よりするも功を擧ぐるの意切なるものあり。況んや彼の戦略は夙に川上の鑑識したる處、太孤山上陸の當初より作戰機宜に適し、殊に遼陽戰に於ける奇功は彼が渾身の智略を傾倒したる結果に外ならず。戰後薩の諸將は黒木爲楨の現役名簿より除かれたるを筆頭とし、大迫尙敏といひ、鮫島重雄といひ、伊地知幸介といひ、誠首の刑を免れざりしに、獨り上原の長閑全盛の陸軍に容れられたるを見て必ずしも不遇にあらざるを説く者あるも、若し閑觀念を去りて眞に高材逸足を擧ぐるの意ならば、上原の如きは夙に參謀次長となりまた陸相たるの當然なりしなり。而も薩閥凋衰の影響を受けて權力の中心より遠かり、殊に野津の歿後は志を得ざるの著しく、久しく北邊の師團に遷されて殆んど存在を忘れられたる形なきにあらざりしも、昨年宇都宮に轉するに及び漸く世人は此英才に向つて

記憶を喚び起したるが如し。

川上門下にして寺内の爲めに敵られたる者の中俊豪として見らるゝは中將東條英教を第一とし、少將黒澤源二郎、伊豆凡夫、恒吉忠道等之に亞ぐ。東條は獨人メツケルをして獨逸の陸軍に入らしむるも第一流の參謀官たるを失はずとまで驚嘆せしめたる程の戦術家なれども、餘りに狷介にして學究的に過ぐるが故に多衆と調和するに適せず。嘗て寺内に反抗し長谷川を論難して長閑の爲めに忌まる。黒澤は戦術家として又露國通として名あるも人格上指彈さるべき缺點あり。伊豆は大言壯語したる程に聯隊の成績擧らず寺内の爲めに睨まるゝこと年あり。上原は品性高く議論に伴ふに實行を以てし、又東條の如く嚴格一方の窮窺家ならず、孰れかといへば融通の利く方なり。さりとて八方美人主義にあらず氣骨の見るべきあれば長人の使令に甘從せず、今

日に至るまで長閑の專恣を憤り、又自家の不遇に對して平かならざるありしも、他の不平家の如く之を言動に現はすが如きなく、到底大勢に抗すべからずとし、氣を下して雌伏したるが如し。斯るは彼の人物の稍々大なる所以にして東條、黒澤等の遠く及ぶ所にあらず。殊に自信力の強き一旦口にしたる以上は斷乎として枉げざるの概あるも、去りとて頑冥といふにあらざれば説くに道理を以てすれば驕然として之に服従するに躊躇せざるなり。彼が朝野を通じて評判好く、長閑内にも彼に推服する者多きは獨り卓犖の幹能を認むるが爲めのみならず、又武人として尊敬すべき人格を具ふればなり。人或ひは上原の今日ある外舅野津に負ふ處少からずと爲せども、斯るは尋常一様の駙馬を以て目する者、縱令野津なしとするも當世に顯はるべき天分あり。初め彼は軍人無妻論者なりしを以て各方面より結婚の勸誘を受けたるも應せ

す、漸く三十五歳の時野津の舊恩に絆されて其女を娶りたるなり。

下

非長閥派の上原を陸相に擬したるは已に久しき以前よりのこと、現に昨年内閣組織の時にも石本の就任を諾せざるに於ては彼を擧ぐべき内議さへありたり。蓋し長人の意成べくは同系中より陸相を得んと欲し、も容易に適任者を發見せず、中將宇佐川一正は器幹具はらざるにあらざるも、一旦陸軍を離れて前垂掛けの身となりたれば此椅子に据る難く、長岡は山縣の寵あれども寺内に喜ばれず。木越は桂の信用あれども本人自ら大臣たるを好まざるのみならず、一部には彼の節度に服するを欲せざる者あり。是に於てか餘儀なく軍部を通じて久しく定評ある上原に落札せざるを得ず。殊に上原は日清戦争の時第一軍參謀として司令官山縣を佐け、又士官學校時代にも佛國留學時代

にも寺内の教導監督の下にありたれば、山縣も寺内も上原に對する感情は他の薩人に對すると少しく異り一概に謀叛人視せるにあらざるらし。世間にては上原の入閣を以て一に西園寺の英斷に出でたるもの、如く稱揚するも、斯るは政府の實情に迂なる者の見のみ。武人萬能と稱せらるゝ今日、殊に情意投合の繼續を聲明して事毎に長閥の承認を得ざれば決行する能はざる西園寺内閣が、自由意志を以て陸相を選叙するが如きは有り得るべからざること、現に昨年内閣組織の時其選擇を山縣、桂、寺内の三人に一任したるに徴するも明かならずや。斯くの如く上原と山縣、桂、寺内との關係は直接なるも西園寺とは間接なる以上、唯だ良陸相を得たりと云ふまでにして政府と陸軍省との關係は石本の時代と毫も異なる處なく、上原が西園寺侯の眷顧に報いんといへるは表面の辭令に過ぎざるのみ。

世人の口を揃へて上原の器幹を稱するは可なるも、恰も革命家を迎へたるが如く一擧にして軍部の積弊を除くを得べしなど、餘りに多くの期待を屬するは眞に上原を祝する所以なるか、若くは最負の引倒しなるか、上原自身は恐らく有難迷惑に感せん。勿論上原は軍政上の識見を有し又久しく參謀本部にあれば中央の事情にも暗からず、殊に輿望を負ふて立つ以上歴代の大臣に劣ると稱せらるゝは不本意なるべく、彼にして眞劔に利器を試むれば一廉の事を爲し得るの自信あるべし。去れど今の陸軍に大斧鉞を下し、眞に根本的刷新を遂げんとせば先づ要路の長人を逐ふて代ふるに閣外の適材を以てするの大決心なかるべからず。尤も彼にして或る強大なる後援的勢力を有し、忌憚なく自由手腕を揮ひ得るの立場にあらば必ずしも不可能なるにあらざれど、薩摩系は政治の上にも又陸軍部内にも殆んど全滅し、さりとて薩以外に彼を

盟主に推すべき程の纏りたる勢力あるにあらず、殊に四圍の事情は容易に急激なる改革を許さざるべし。若し強て手を下さば事の結果は人を斬るの刃を以て却て自らを殺すに終らんのみ。上原の大勢に通ずる如何に長閥を惡むも、さる革命家的の考ありとは思はれず。況んや山縣なり桂なり寺内なり初めよりさる異心なしと安心して彼を推薦したるをや。蓋し彼等の意を付度するに長閥非難の聲歳と共に高まれる今日、純長人若くは長閥綱に入れる者を大臣とせば、益々世人の同情を失せんことを恐れて申譯的に雅量を示し、一面には薩人の反感を緩和するの策に出でたるもの、一時斯くするも岡市之助、田中義一、大井菊太郎、大庭二郎等の近き將來に大臣たるべき英俊の控ふるあり、軍部に於ける長閥の位置は貧乏搖ぎもせざるべし。長人の情偽斯くの如しとせば、上原は畢竟薩閥の最後を飾るべき一輪の名花と見るべきのみ。

されど一時的にもせよ上原の如き異系の人材が軍政を宰するは始めより宰せざるに優り、上原の力縦令長閥の根本勢力を覆すを得ざるまでも何程か爲す處あるは前任者の全然柔順無爲の傀儡なりしに比して勝れりとすべし。

左遷されたる上泉少將

昨年太田大佐の軍政改革論以來暫く問題に上らざりし我が海軍は、少將上泉德彌の轉補に依りて端なく世上の物議を起し、一時は騒ぎの那邊にまで及ぶべきか測るべからざる有様にて、或は上泉を神の如く謳歌するあり、或は海軍當局者を味噌糞の如く攻撃するあり、從來餘り世に知られざりし上泉の

俄に有名となれる、猶ほ太田大佐の場合に異ならざれども、一方より見れば之が爲めに上泉の立場を一層困難ならしめ、何程か最負の引倒しの嫌ひなからず。凡そ人情失意なるを憐れみ得意なるを惡むの常にして、斯くの如き問題には往々感情の伴ひて議論の公正を失するなきを必せざれば、傳ふる處恐らくは褒に過ぐるあり、貶に過ぐるあらん。褒に過ぐるも非、貶に過ぐるも非、唯だ事の是非を評するに當りて務めて公平を期せざるべからず。

當局者は上泉の轉補を以て他意あらずとし、且つ斯る更迭は人員の割振上從來とても其例なきにあらずとして辯疏甚だ務むるも、鎮海灣司令官の要職より從來大佐を以て充て來りし横須賀水雷團長の一散官に移したる、苟くも常識ある者より觀れば疑ひもなき左遷にして、而も一種の降級處分ともいふべきものなり。當局者が斯る處置に出でたる、無論相當の理由なくして叶は

ぬ次第ながら、今日に至るまで未だ其理由を明示せしを聞かず。明示せざるは憚る處あるに因るか、上泉の人格を累するを氣の毒に思ふが爲めなるか、軍紀上止むを得ざるに出でしとせば、如何なる點が軍紀に觸れしとするか、何等罪すべき理由なく、唯だ或者の私情を以て漫に動かしたるか、事の是非曲直は之を明かにして初めて定まる。

我輩曩に軍部の現状を慨し、聊か時弊匡救の先聲を作すの意より「薩の海軍長の陸軍」の一書を公けにし、私闘權を弄して横肆に至らざるなく、陛下の軍人をして不平怨望の聲を絶たしめざる所以を論じたり。之に依て何程か濫妄非違の改まるべきを期待したるに、今に至るも著者の志未だ酬いず。而して上泉轉任のこと一少將の榮辱問題に過ぎずと謂はゞ夫迄なれども、適よ情弊の依然として存するを暴露せずや。殊に鎮海灣は今や經營の半途にあり

て、上泉の此地を去る勢ひ民間の企業頓挫するを免れざれば、轉任の報傳はるや鎮海の住民は錯愕措く處を知らず、地價は暴落し、或は市民大會となり上泉留任陳情書となり、或は不穩の電報を海軍大臣に發したるあり、或は委員を上京せしめて當局者に迫るあり、物情恟々殆ど業を廢するに至る。齋藤海相は鎮海の軍事的施設に變更を加へずとて慰撫に努めたれど、司令官其人を更ふる以上方針の異なるは蔽ふべからざる事實なれば人心は容易に安んぜざるべし。去りとて一旦發表したる轉任辭令を取消すは海軍省の威信に關するを以て當局者も平氣を裝ふものゝ内心大に苦悶したるらし。而して斯くの如く平地に波瀾を起し、折角の英才を槽檻の間に泣かしむる果して誰の罪ぞ。上泉は會津の人、明治二十一年を以て兵學校を出づ。軍令部參謀有馬良橘水雷學校長矢島純吉、教育本部第一部長石井義太郎、舞鶴豫備艦隊司令官山

部内一人の及ぶべきなく、日露戦争中大本營に在りて殆ど終日酒を絶たず、友僚皆な健康を害せんことを憂ひたるも、彼の神色平日に異らざるのみならず、繁劇なる職務を執るに當り一絲紊れざりしを見て驚異せざる者なかりしといへば、其頭腦の明敏と精力の旺盛なるを知るべし。殊に彼に於て偉とすべきは人心を收攬して怨望なからしむる點にあり。是れとても人爲的の術策を其間に弄するにあらずして、彼の人と爲りより來る自然的徳望に出づ。毎年四月十五日と十月十五日に下士卒の進級を行ひ、海上勤務の者は其都度水兵室に祝宴を張るの習はしなるが、上泉の某艦長たりし時、自ら水兵室に至りて彼等と伍して祝酒を酌み、談笑を交へ、毫も艦長と水兵の區別を置かざりしも、一たび艦長の職務を行ふに當りては其嚴格なる恰も別人の如く、恩威並び行ひたるが故に配下の士も好艦長を得たりとして彼の徳度に悦服し

き。現に鎮海灣に於ても住民舉げて彼の平民的氣分に懐き、中には一朝事あるの時彼の爲めに水火に入るも辭せずと誓ひたる者さへあり。鎮海の市民が上泉と別るゝを惜むは獨り同市の前途を悲觀するが爲めのみならず、又彼の人物を愛慕するの情に出づ。

然れども人の世に立つ味方あれば必ず敵あり、現に海軍部内に上泉を喜ぶ者の少からざると共に喜ばざる者も多し。喜ばざる者は彼れ豪放磊落を装ふも其實頗る如才なく、權門勢家の歡心をも求むれば瑣細なる事にも神經を惱まさざるにあらずとて其偽豪傑なるを貶す。されど斯かる評の當らざるは彼の行實に照らして明かなる處、縦令悉く褒者の言ふ如くならずとも、一箇の人物たるを否定し難し。唯だ彼は常に大膽なる活動を好み、時として規矩繩墨の外に逸出するなきを保せざれば、狹隘なる紀律の上より見て非難すべき

の多からんも、上泉の長所も亦た此に存せずや。

鎮海灣防備隊司令官兼臨時建築部長の職たる單に既成軍港を宰すると異り將來大軍港とする目的の爲めには軍事行政以外に市街地の經營、繁榮の増進に任せざるべからず。既に計畫の斯く定まれる以上、上泉をして充分の手腕を發揮せしむるは當然のことに屬し、又海軍省が上泉を鎮海の太守としたるの意も恐らく此にあるべし。四十四年秋、彼の大湊要港司令官より鎮海灣に轉任して以來、北方市街なるものを作りて之を學校組合に無償貸與し、或は内地の富豪を説きて生産的事業を盛んならしむるの計畫を立て、最近民間事業家の五十萬圓の資本を以てラジウム會社を設立することゝなるや、彼は繁榮上大に力を添へ、本省に運動して二十五萬坪の海軍用地を貸下ぐる等不斷の精力を以て積極政策を實行せり。其結果赴任後未だ其年ならずして戸數二

千餘を算するに及び、其他道路の如き家屋の如き實に堂々として大市街たるべき規模を具へ、前任者時代衣食に窮したる邦人及び鮮人の労働者は職を得て上泉を徳とするに至る。赴任後一夕部下と共に旗亭に飲む。十二時に及ぶや雪兒皆な絃歌を廢し、寂として火の滅したるが如し。彼れ曰く苟くも殖民地に在ては酒と女と先に立つべきに、斯かる野暮なる命令を發して活氣を殺ぐは篋棒千萬なりと、直に警察官を面前に喚びて叱咤し、「構はぬから遣れ」と令して更に大に飲み大に歌ひ夜を徹して曉に及べり。斯かるは聊か暴といへば暴なるも、夫の寺内正毅、明石元次郎の輩が表面謹嚴端直を装ひて料理屋待合を征伐しつゝ裏面に於て正反對の振舞あるに比すれば、寧ろ上泉の露骨にして僞らざるを愛すべしとす。

上泉の左遷事情に就ては世間區々の説あるも、歸する處は餘り遣り過ぎた

るの一事に外ならず。或は曰く前任者宮岡直記時代は奸商出入して随分如何はしき噂の外間に漏れ、宮岡の罷められたるも幾分か此種の缺點ありしに因るらしきが、上泉は赴任後第一着手として奸商を驅逐し、物品を拂下ぐるに競争入札を以てし、専ら情弊を除くに努めたれば、奸商中權兵衛若しくは財部に上泉を讒訴せしあり、或は朝鮮在任の邦人中上泉を喜ばざる者は彼を陥れんが爲め羅織して誣ひたるもあるべく、言ふ者の衆ければ聞く者も終に之を信じて左遷の一因となれりと。衆口金を鑠すといひ、三人市に虎を出すといふこともあれば左る事情もあるべきか。されど次官財部彪の細工に出でしといふの恐らく事實に近きものならん。世には陋劣なる人物多しと雖も、僻み魂性、嫉妬心の強き者程卑むべきはなく、是等は坊主上りと書家とに最も多しと稱せらるゝが、孰れの社會にも之あり。財部は權兵衛の鑑識して佳婿とし

たる丈けに萬更の代物にあらざるも、天性狐疑心深く、人の成功を妬み、己れと同等の能力若くは己れ以上の能力ある者を喜ばず、前には大佐太田三三郎を窘逐し、奥宮衛を馘り、近くは經理局長福永吉之助を逐ひ、其他彼の爲めに不遇の位置に立ち或は部内より退けられたる者を擧ぐれば僕を更ふるも能はず。上泉の器大にして政治的幹能ある、財部とは比較にならず。上泉の財部に對して釋然たらざると同時に財部も上泉を敵視せり。殊に上泉は鎮海灣に於て人望を博し恰も英雄の如く崇拜さるゝあり、又東京記者團の朝鮮を視察して上泉の事功を稱揚し、聲名の更に高まるあり。是に於て財部は益々之を妬思し、且つ新聞記者と上泉の間に脈絡あるにあらずやと猜疑し、延て他の記事までも上泉の口より出でたるものゝ如く邪推せり。而して彼は上泉を司令官の位置より叩き落さんが爲め、海軍用地貸下の事を利用し、先づ皇

父權兵衛を説き、更に權兵衛より齋藤に説き、一面には同じく權兵衛の女婿たる大佐山路一善と通謀して軍令部の内より熾んに反對の聲を立てしめたり用地貸下は未だ公式の手續を了せざるも、豫め海軍大臣の許諾を経たるもの若し齋藤にして強く出づれば今回の如き事なくして済みたらんも、傀儡大臣の悲しさには權兵衛、財部、山路を敵としてまで上泉の爲めに計るの勇氣もなく、遂に左遷處分に同意するの止むを得ざるに及ぶ。されど彼は自然板挟みの位置に立ち苦衷の察すべきなきにあらず。唯だ吐舌三寸我が計成れりと喜べるは財部一輩のみ。然るに部内の任免易置は大臣と人事局長之を行ひ、次官たる余は初めより與り知らずといひ、上泉と余とは兵學校時代よりの親友にして何等其間に蟠まるあらずといへる、白を切るも甚だしく何處を押せば斯かる音の出づるにや。

今日は權兵衛を中心とせる閥閥全盛の時代にして、財部は岳父の勢を恃みて隱然大臣の事を行ひ、齋藤の如きは殆んど眼中に置かず、豫算及び整理案は専ら主計大監宇都宮鼎と計り、經理局長志佐勝の如きは有れどもなきに同じ。而も彼の好んで近づけ又引立つるは幫間的人物にあらずんば則ち姪の結婚媒妁を爲して準閥閥に列するの徒なり。上泉の後を承けて横須賀水雷團長より鎮海の守に榮轉したる山田猶之助も其一人とす。古の人、正を執り平を執する者上に在れば能者常に用ゐられ、直士事に任じて伏怨結ばず、讒佞姦邪由りて進むなく、猶ほ方圓の相蓋はずして曲直の相入らざるが如しといへり。弊の根源たる私閥を破らざる以上、今の海軍に斯くの如きを望むも効なし。

市長としての阪谷男

北米合衆國には大統領候補者選舉の爲め國人舉げて血を沸かし、共和黨に於けるタフト對ルーズヴェルト、民主黨に於けるウキルソン對クラークの目覺しき活動振りは實に天下の奇觀にして、東西兩半球の國民の耳目を聳動しつゝある時、我邦首都に於て市長選舉を行はんとし、デモクラット黨大會が四十六回の決選投票を行ひたる末、遂にウキルソンを大統領候補者に擧げたと略す日を同うして、東京市政團體たる常磐會、清和會及び中立派は男阪谷芳郎を市長候補者に推すの議を定めたり。

是れより先き尾崎行雄の市長を辭するや、後任候補者に數へられたるもの阪谷の外に床次竹二郎、奥田義人、松岡康毅、岡部長職あり。奥田、松岡、

岡部は唯だ萬一の豫備たるに止まり、銓衡委員は床次、阪谷の中孰れかを起たしめんとし、殊に床次に對して最も熱心に意を囑したるらし。然るに中頃に至り形勢一變して阪谷に内定したるは策士の暗中飛躍を試むるありて裏面に裏面あるの蔽ひ難きも、由來都市に在ては市長を選ぶに當り之が決定に難みて曠日彌久するの常なるに、兎も角も東京市の早く後任者を決定したる一事は大出来といふべし。唯だ心得難きは近年孰れの都府も自治の本義を忘れて市長を官選的にし、然らざるも官僚中に其人を求むるの習はしにて、其結果市長の職にある者は自ら官吏の氣分態度を以て市民に臨み、市民も亦た市長を見ること政府の役人に異らず。能なきも位階勳爵あるを偉しとし、能あるも無位無勳なるを卑み、甚だしきは市長は勅任官何等なりやといふが如き奇聞を發せしあり。斯かるは無論極端の一例なれども、概して市民の政治思想

幼穉にして自治と官治の別を明かにせず、都鄙を通じて今尙ほ官尊民卑の陋弊を脱せざるに出づ。植村俊平の鐵道院より大阪市長に天降れる、大浦直參の一人にして日比谷慘虐事件の張本と稱せらるゝ前警視廳主事川上親晴の西郷菊次郎に代りて京都市長となれる、吏臭紛々を以て聞ゆる荒川義太郎の長崎縣知事より横濱市長となれる、果して大都市の尹たるに堪ふるの手腕、人格ありや疑はしく、死馬の骨を千金に購へりといふの微しく酷評に失せんも、額手拊膺して迎ふるほどの人物とも想はれず。東京市は第一代の市長として松田秀雄あり、第二代として尾崎行雄を迎へて以來今日に及べるが、此二人者の果して惜むべき人物なるか否かは別問題として、兎も角市民より選ばれたる形あるのみならず、官僚出身ならざる一事は流石に東京市民の見識を認むるに足るとしたるに、今次第三代を迎ふるに際し、他の都市の鑒に倣は

んとするは何ぞや。銓衡委員の擧げたる候補者中、岡部、松岡は大臣の經歷あれども、冢中の枯骨に均しき老物にして殆んど云ふに足らず。阪谷、床次奥田等は吏として相當に成功し、又能力の見るべきなきにあらざれど、教育の普及したる今日豈に獨り官僚のみを以て人材なりといふの理あらんや。仔細に物色せば野に幾多の遺賢あるべく、手腕の遠く群を超ゆるは獲易からざるも、少くも前任者に超ゆるを得難しとせじ。況んや古手官吏や田舎者脅しの殿様に勝る者をや。

阪谷は前大藏大臣、男爵、法學博士の肩書に加ふるに、財界の巨人澁澤榮一の愛婿といふ更に結構なる肩書あり。此四箇の肩書を持參金として東京市に婿入したるは果して彼の爲に幸か不幸か成功か失敗か。最初の呼聲最も高かりし床次の遂に物にならざりしは其間に諸種の事情ありしにせよ、彼れ夙に

東京市の實情を知るが故に、自ら進んで年俸一萬圓の市長となりて險惡なる波瀾の中に捲込まるゝよりも、官僚生活を繼續するの卻て自家の爲めに安全にして且つ利なりと思惟したればなり。阪谷の身を挺して尾崎の古椅子に著きたる自信と勇氣の程は稱するに餘りあれど、先見の明は遂に床次に歸するの結果とならざるか。

蓋し東京の市政機關が多年或る一派の爲めに壟斷せられ、策士跳梁、醜類跋扈、恰も伏魔殿の形あるは隠れなき事實にして、夙に世人は之を米國のタマニー・ホールに比す。前年タマニー・ホールの紐育市政を左右するや、適々紐育警視總監となれるルーズヴェルトは例の棍棒政策を専ら此團體に振向けたる結果、さしも暴威を揮ひたる首領クロッカーを一時屏息せしめたるも、深く根柢を植つけたる不良勢力は永久に抜く能はず、再び頭を擡げ一千九百二

年マツファイのクロッカーに代りて首領となりて以來、惡辣なる手腕を以て殆ど紐育州の民主黨を左右し、時として大統領選舉の形勢を動かし、現紐育市長ゲンナーの如きはタマニーの傀儡たるに過ぎず。東京市の多數黨たる常警會はタマニー派の紐育市に於けるが如き勢力なきも、凡そ利益問題といへば必ず裏面に彼等の關係せる之に似たりといふべく、曾て常警會の前身たる金曜會を提げて横暴を極めたる故星亨をクロッカーに比すべくんば、星の歿後其衣鉢を傳ふる森久保作藏は猶それマツファイの小なる者といふべきか前任者尾崎は前後十年間森久保一派の傀儡なりき。前東京電氣鐵道會社社長家尊福も操縦の絲は常に森久保の手に握られたりき。其他凡そ市長の名に於て行ひたる市の事業の背後には必ず森久保及び利光鶴松の伏在せざるなし。今次の市長後任問題についても森久保の關西の旅行より歸るを待ちて始めて

候補者選擇に着手したりといふ程にて、彼の市會に於ける地位勢力を察するに足るべし。一説によれば彼の初めより囑望せしは床次にもあらず、阪谷にもあらず、同系の利光及び井上敬次郎一輩と通同し、彼等の關係せる鬼怒川水電を東京市に結付くる爲め、元と創立委員長たりし田健次郎を推薦するにあり。六月二十九日銓衡委員より床次に向ひて公式に交渉を爲すの定めなりしに其前日森久保の竊に阪谷を訪ひしは、阪谷の無論承諾せざるを豫測したるに出で、斯くして床次を氣拙く思はしめ、双方不調に歸せしめて最初の目的を達せんとしたるなりと。事の疑はしきも森久保としては這般の策を畫き兼ねまじく、田健推舉のこと全然訛傳なりとするも、或ひは操縦に最も便なる千家尊福を意中の人としたるやも知るべからず。

斯くの如き不良勢力の下に置かるゝ東京市長たる者は醜類を壓倒し去るの

器幹膽略を具ふるか、然らざれば右向けといへば右、左向けといへば左を向く無能の好人物たらざるべからず。尾崎は多年政黨の飯を食ひ、野武士と伍して苦き經驗を嘗めれば、タマニ一の渦中に投じてお茶を濁すを得たれど、阪谷は岡山の儒者の家に生れ、明治十七年大學を出で飛鳥山の別莊に於て澁澤の娘に見染められ、大藏省に入りて參事官より局長に、局長より次官に、次官より大臣に歴階したる順境兒にして、學才もあり頭腦も明敏に、吏としては異色ある中に數へられんも、謂はば世間見ず苦勞知らずなり。曾て田尻稻次郎よりは坊つちやんと云はれ、井上侯よりは青二才と罵られ、大藏省の屬僚よりは大臣の態度なしと輕んぜられ、甚しきは春晝の殿様と綽名するあり。閱歷の割合に重んぜられざるは器小にして稗氣術氣を脱せざるに因るらし。前年大藏大臣たりし時、神戸築港起工式に臨み自ら淨海入道に擬して口善惡

なき京童の話柄に上りたるが如き、得意満盛の餘に出でしとはいへ小兒的なも亦た甚だし。近者經濟學協會に於て米價騰貴問題を議するや、會するも無慮數百名宴半ばにして彼は桂公の送別會に列せざるべからずとて辭し去らんとす。人あり幹事たる足下の去るは大に不都合なりと詰るや、彼れ眞面目くさりて曰く、余は一旦辭拒したるも、桂公は是非乃公の出席を仰ぐとの依頼なれば止むを得ずと、頗る得意の色あり。聽く者皆な肚裏に笑ふ。昨年瑞西の萬國經濟家會議に參列して以來、暗に第一流の經濟學者を氣取り或ひは米國著名の經濟家フイツシャーより書を寄するや、之を知人に吹聴して己れの偉きを誇示せり。釋氣愛すべきも、斯かるは人物上の眞目を添ふる所以にあらず。而して彼は到底人を威壓するの膽氣なく、去りて木偶坊となりて無爲に過ごし不得要領を持する丈けの大度量もなく、孰れかといへば仕事

を好むの風ありて屬官に委して差支なき煩瑣事故にまで立入り、稍々重箱楊子の嫌ひなからず。第一次西園寺内閣の大臣となりしは外舅の勢力に職由し、澁澤と井上とが後見役となりて面倒を見てすら遂に罷むるの餘儀なきに至れり。爾來井上の信用を失ひ、西園寺も復び彼を用ゐんとせざるは大臣としての手腕を危めるにあらざるか。

彼が一も二もなく東京市長たらんことを諾せし表面の辭令としては平素市政に多大の趣味を有し、殊に帝國の首都たる東京の市政調理に當るを名譽とすといふにあれど、事の實際は三箇の理由に出でたりと察せらる。彼れ再び廟堂の人たらんことを期待するも、他日官僚内閣組織せらるゝの曉、若槻禮次郎に大藏大臣のお鉢の廻るは既定の事實と見て差支なかるべく、遠き未來は知らず近き將來に彼の入閣を望み難しとせば、長く無爲閑散の地に居るは

胸中煩悶に堪へざる者あり、是れ其一。市政の現状を知らざるにあらざるも、乃公の勢望と手腕とを以てせば森久保一派を靡伏せしむる容易の業のみ。況んや従来東京市と密接の干繋を有する『濫澤さん』の後援を以てするをや、是れ其二。彼れ稗氣の分量多く、自ら買被るに過ぎたる、曾てパーミンガム市長たりしチャンパーレンを氣取りて一大功績を擧げんことを夢想せるにあらざるか、是れ其三。

阪谷を以て前任者尾崎に比すれば、甚だしく劣らざるも、甚だしく勝れりとも見えず。尾崎には尾崎の長所あり、阪谷には阪谷の長所あり。去れど尾崎の長所は寧ろ黨人たるに存し、阪谷の長所は官僚として之を發揮するに適せん。凡そ世に非常の人ありて然る後ち非常の事あり、非常の事ありて然る後ち非常の功あり。非凡の人とも思はれざる阪谷は東京新市長として市政の

腐敗溷濁を救ふに堪ふるか、單に裝飾的お雛様の市長たるに止まるか、或ひは常磐會の傀儡となりて前任者の轍を履むに終るか。

最近の大隈伯

城北に偉人あり、古稀を過ぐる四、氣魄、識見、精力共に絶倫にして老來益々壯を加へ、家に在ては常に四來する群客を引て談論を上下し、出でては公私の諸會に臨んで長廣舌を振ひ、或は諸種の事業に携りて一日も活動を止めず、天下皆以て當代稀觀の人物となす、伯大隈重信是れなり。蓋し彼は怪物の巨擘にして其測るべからざるもの多々あり。

彼れ隻脚を失ひ既に尋常人の半毫すべき類に達せるも、二十五年來未だ嘗て病魔の襲ふ處とならず、夙に起き遅く臥し、接見と談話とに忙殺さるゝが毫も疲勞を感じせず、一日談敵を得ずんば氣分卻て鬱陶を覺ゆといふ、是れ怪の第一。邸第の宏莊にして生活の豪奢なる殆ど王侯に類す。出づるに自動車あり、歸れば家人婢僕十數人一齊にお歸りを叫んで玄關に迎へ、食客常に堂に滿ち、客に饗するの食膳一日として絶ゆるなし。彼れ如何に富むと雖も斯くの如きは到底長く續くものにあらず、而も彼は三十年來此豪快を倦めず、世間皆彼の財源の無盡藏なるに驚き、常に親昵する者と雖も未だ之を知らざるなり、是れ怪の第二。彼の門に出入する者各種類各階級の人物にして政治家あり、實業家あり、教育家あり、宗教家あり、軍人あり、學者あり、新聞記者あり、其他曰く壯士、百姓、曰くハイカラ、バンカラ、曰く彼是屋、山

師等所謂る清濁併呑、玉石無差別、男女混淆恰かも社會の小縮圖なり。而して彼は政治家に對して政論を上下し、宗教家に對して東西の宗教談を試み、學者に對して文學、美術、歴史、哲學、科學の講釋をなす。而も彼の意見は事の何たるを問はず、必ず根柢と造詣とありて平凡の域を脱し往々専門家の壘を摩す。彼の財源の無盡藏なるが如く、彼の知識も亦無盡藏なり。如何にして之を得來りたるや殆んど測るべからず、是れ怪の第三。

彼れ初めより文勳を以て立ち未だ戰爭の經驗なし。然れども八太郎時代より養度胸を以て鳴り、後年逆境の人となるに及んで益々膽勇を加ふ。憲政黨内閣組織に際し、伯板垣の兩黨權衡論を提唱して夜迷言を並ぶるや、彼れ奮然として起ち組織中止を叫ぶ、兩黨の士彼の膽氣恐るべきを知りぬ。彼れ同郷の士にして陸軍部内有數の戰術家少將宇都宮太郎一日彼を訪ふや、彼は支

那周時代の兵法より説起して歐洲各國に於ける戦術の變遷に及び、更に現時日本の戦法を講釋し宇都宮をして煙に捲かしむ。宇都宮は歸途友人の家に至り『大隈から戦術の説法を聴かされて弱つた』と滾し且曰く、然れども伯の智識の該博なる實に驚くべしと。大隈常に曰く、余は自ら劍を執らざるも四十年前戦術を學べり、其高等兵學に至つては敢て今の老將軍に譲らすと、言ふ處愈々出で、愈々怪なり。

今日大隈は直接國民黨と關係なく、全然黨外の人如く見ゆるも、世の多くは今も猶國民黨の大隈伯として之を見、將また大隈伯の國民黨として之を視るが如く、現に總理問題の起る毎に彼の名の出づるを常とし、又實際總理たらずと謂ふまでにて、多年同黨を手鹽に掛けたる生の親たる以上、切つても切れぬ關係ある勿論なり。彼の進歩黨總理を罷めたるは自動的にあらずし

て實は大石正巳等の爲めに餘儀なくされしなり。當時大石一派は大隈を元老に祭込む運動を試みたるも奏効せず彼は早く之を觀知したり。

翌年進歩黨内に持上りたる犬養對大石の争ひに對する彼の態度は猶ほ昨年伯爵會對伯爵同志會の紛紜に對すると同じく些か態度の明瞭を缺き、吾人をして彼の心事を疑はしめたり。尤も彼の立場として是非曲直の裁斷をなし得ざらんも、彼の勢望威信を以てして施すに其方法を以てせば、兩派の争は甚しきに至らずして濟みたらんも知れず。争ひの激増するに伴ひ、遊説の術に長せる大石の早稻田に日參して犬養の非なるを讒訴したるは其窮するの餘り之を利用せんとしたるのみ。其心術を知りてか知らずか、最初よりの直參にして而も同主義の犬養を疎んじ、忘恩者にして異主義の大石等に心を傾けたるは千慮の一失にあらざるか。然れども彼は殆んど進歩黨に愛憎を竭せり、

凡そ現時の政黨といふ政黨を見限りたるが如し。されど政黨を離るゝも、政治は彼の生命なり。故に好んで政治を談ずるは今日も昔と毫も渝らず。唯だ彼に於て認むべき最近の著しき傾向は好くいへば其意見の圓熟したること、悪くいへば以前程大膽不敵ならざるにあり。

國民教育家としては何程か成功せるも、政治家としては失敗の記録を以て滿たさる。去れど彼の偉大なるは他の元老の如く徒に過去を追懷せずして現在に活き將來を談ずる點にあり。維新史編纂顧問を辭して半毫政治家の仲間入りをせざりしも之が爲めなり。其成功の至難なるを知りつ、南極探檢の責任者となり、自ら一萬金を支出したるも之が爲めなり。彼れ常に曰く、我輩の如く瘡痕の多きはなし、去れど悉く向ふ疵なるを見よと。彼は未だ曾て愚痴を口にせず、胸中時として煩悶なきにあらざるも、之を人に示すは勇者に

あらずとすればなり。如何に瘦我慢の強きかを知るべく、而して此に彼の長所ありとす。

彼れ近頃荐に軍隊を訪ひ、軍隊も亦た元帥の禮を以て歡迎するより、彼と藩閥との間意志の稍と疎通せるを説く者あり。實際さる傾きのなきにあらず。隨て彼の議論も山縣、桂に對して攻撃的ならず、寧しろ何程か緩和せららし。山縣、井上、松方、桂等の事ある毎に爵の進めるに、獨り大隈の長く伯爵に固定せる、若し侯爵とせば或ひは貴族院を擡廻さるゝの恐れなきを得せずとて山縣、桂等の反對したるに因由するも、今日の有様にては近き將來に或る機會を以て陸爵せんも知るべからず。去れど侯爵に進むも伯爵の儘なるも、天下の大隈るに上に毫も増減なし。本年六月山陰道に旅行するや、土地の官民は鐵道開通式に參列せる大臣大將を閑却して彼一人を歡迎するに熱狂し

たるが如き、彼の勢力の盛んなるを知るべし。要するに彼は日本の國寶なり。外人の來遊する者富士山、日光、奈良の大佛を觀ると共に必ず大隈に接見せんことを待望せざるなし。天此偉人に假すに百二十五歳の壽を以てし、長く早稻田王國の無冠の帝王たらしめよ。

死處を得ざる二名士

嘗て朝野の政治舞臺に活躍して盛名江湖を壓したる者にして、時代の推移に伴ふて漸次活動圏外に投出さるゝと共に、終に社會の記憶より遠かり、生けるか死せるかの明かならず、坐ろに哀れを留むるもの其人に乏しからず。中

に就て其末路の最も振はざるは夫れ板垣退助にあらずや。板垣は今代の麒麟閣上に列すべき明治功臣の一人なり、當時彼と比肩したる他の功臣多くは威權赫灼として安樂に餘生を送り得るの果報を負へるに、彼は陋巷に老ひ、氣力衰へ、常に聽音器を耳にして客と談を交へ、加ふるに家計の窮迫を以てし、往々米鹽薪炭の資に窮す。

人間死處を選ばざるべからず、一たび死處を得れば死花を咲かし、死するも忘れられず、之に反して死處を失すれば所謂死に勝るの恥あり。故伊藤を以て前者に近しとすべくんば、板垣は後者に屬し、命長ければ恥多しの古諺彼に於て適切なるを見る。岐阜遭難は果して死處を得たるものなりや否やを知らずと雖も、彼の氣魄精力の高潮時代は遭難前後にして、盛名滿天下に鳴りしも亦此時にありしが如し。明治廿九年伊藤内閣に入りて内務大臣と

なり、其後大隈と聯立内閣を組織して再び内務大臣たりし時は即ち伯の政治的生命の絶頂に達したる時代にして、彼が大隈伯と衝突し、憲政黨内閣の破壊すると同時に、彼の政治生命は終局を告げたるなり。爾後猶暫らく憲政黨の黨首たりしも、唯だ虚器を擁するのみにて其實權は怪傑星亨の巨腕に歸したり。斯くの如くにして彼は漸次仲間より無用の長物視せられ、多年心血を灑ぎて養成したる自由黨は伊藤の手に移れり。故に彼は自動的に政界を辭したるにあらず、寧ろ廢黜せられたりといふの當れりとなす。

政界の死亡者たる彼は社會事業に於て復活せんとするの觀ありたれども、終に復活せざりき。兩三年前華族一代論を提唱するや、板垣の名は何程か世の記憶より喚起されたれども、何日とはなしに世人の耳目より遠かれり。彼の盛時に於て知遇を受け、節度に服したるもの少からざるも、皆私福を營むに

急にして一人の之を顧みるなし。蓋し彼は日本一の正直者なり、惡くいへば餘に馬鹿正直なり。是れ彼が目を懸けたる者よりは馬鹿にされ、産を成し得ずして餓中塵を生ずるの窮困を脱せざる所以とす。曾て並び立たざりし政敵大隈の自動車を飛して活動せるに反し、板垣の借馬車を驅れる狀の如何にも見すばらしき、實に絶好のコントラストを成す。彼が光輝ある前世紀を知るもの豈一擲の涙なきを得んや。

兩三年前政界の不遇者相寄りて國民議會なるものを計畫し、大井憲太郎の名の發起者列に加へらるゝを見き。而も國民議會は如何なることを爲すものなるかを知る者少く、又大井の名に對しても世人は何等の注意をも拂はざりき。大井は政界の大亡者、其社會より忘れられ、轆轤不遇の境にあるの久しき未だ彼が如きはなかるべし。彼の本姓は元と高並、大井ト新の爲めに知ら

れて義兄弟の交を訂し、初めて大井姓を冒す。父祖は累世豊前宇佐の豪族にして馬城山の下に住したるより馬城を以て其號とせるなり。彼は故中江兆民と共に最も古き佛學者にしてルーソーの民約論に依り初めて自由民權宗の洗禮を授けられ、舊自由黨に在ては現存せる在野政治家中板垣に亞ぐの先輩たり。

大井の全盛時代は青年壯士の欽慕すること恰も衆星の北辰を廻るが如く、彼れ一たび塵ねけば争うて其門に来る。當時聲名を齊うしたる星亨は大井の競争者なりき。然れども大井は關東派の首領たると同時に、關西の健兒をも提げたれば星も彼の勢力には一籌を輸せざるを得ざりき。大阪事件は彼が鐵血主義の最後の活動にして、又政治的生命の盡きたる時にはあらざるか。蓋し獄中にありし數年間、星は大井の勢力範圍を奪ひて自己の手中に收め、大

井の出獄したる時、關東派は舊主に一顧眄を與へずして、新主の節度に服したれば、捲土重來の策を施すべきなし。第一期議會の時、同志の殆んど總ては選ばれて衆議院に入り、曾て彼の幕僚たりし新井章吾、小林樟雄等も代議士となりしが、獨り大井は落伍したり。爾後纔に一回代議士となりしも、更に光彩を放たず、政界より秋の扇と棄てられにき。爾來常に失意の境に立ちて悶々の情に堪へず、錢あれば則ち酒を被り、紅友を聘び、亂酔すれば大喝して他を罵る、蓋し中情激する所あればならん。然れども彼の雄心は全く衰へず、新嘉坡に遠征して貿易商を營みたるも、到底彼は牙籌の人にあらず、忽ち失敗を招き、歸來勞働問題に盡す所あらんとせしも、餘り社會の視聽に觸れず、世人は全然彼を忘れ去れり。

大井は政治思想の幼稚なる時代Ⅱ爆裂彈主義、暗殺主義の恐怖時代Ⅱに

於て活動するに適當の役者ならんも、今日の時勢に在ては到底不適者たるを免れず。四十二年春進歩黨非改革派の猛然として起つや、彼れ犬養木堂に折束して其志を壯とす、大井老ゆと雖も猶志士の面影を存せり。其の後彼を上野精養軒の普通選舉會に見たり、最近には日比谷松本樓の浪人會に見たり。獅々の如き顔には老皺波の如く寄り、腰骨將に弓の如くならんとし、出席者の多くは起ちて一場の演説を試むるも、彼れ獨り默然として一隅に居るを以て何人も當年の傳記的英雄たる馬城將軍の此に來れるを知るなし。蓋し彼も亦た死處を失ひたる一人歟。

未成品後藤新平

月給四圓の給仕、他日風雲に際會して臺閣の人氣男たるべしとは當時誰か之を豫想せんや、人事の變、運命の奇實に測るべからざるなり。去る四十一年第二次桂内閣成立に際し、後藤の入りて遞信大臣の印綬を帶ぶるや、世間意外の感に打たるゝ者多かりしと同時に、彼の入閣を歓迎して新内閣の異彩とする者あり、又世間の一部には彼を以て他日内閣の禍根たるべき危険性の人物と思惟したる者もあり。然れども是れ俱に彼を買被り過ぎたる者、有體に評すれば彼は内閣の異彩にあらず、又恐るべき爆發的危險物にもあらざるなり。

凡そ人の世に在る何程か誤解さるゝの常なるが、古より人を正解する者稀

れなると共に正解さるゝ者も亦稀なり。唯だ善く誤解さるゝと悪く誤解さるゝとに依りて人の運命に幸不幸あるを免れず。前文相小松原英太郎の嘗て解を民間の新聞に操るや、其論危激にして數次筆禍を買ひて獄に下る、今日の彼と當年の彼とを比較すれば全然別人の觀あり。後年彼の膝を藩閥政府に屈して井上馨の籬下に立つや、短氣者の井上は屢々彼を面罵叱咤し、甚だしきは鐵拳を加へ足蹴に掛けたり。斯るは少しく氣骨ある者の忍ぶべからざる處なるも、小松原は能く隱忍して須毫も井上に抗せざりき。井上之を奇とし以爲らく英や大志あるにあらずんば焉んぞ能く忍んで斯くの如きを得んや、大器輕んすべからず大に用ゆべしと。然れども小松原を以て夫の下邳の圯上、異人の爲めに深く折辱を受けたる留侯の如く、其挾持する處大にして其志甚だ遠きと同一に視るべけんや。彼の人情忍ぶ能はざるを忍びしは畢竟一身の

聞達を念として井上を失はざらんとする卑屈心に出づ、而も彼が井上の推輓に依て漸次官場に地歩を占め、終に今日あるの階梯を致したる、乃ち「善く誤解」されたる結果のみ。後藤の今日ある亦安んぞ善く誤解されたる賜ならざるを知らんや。

最初後藤を知るの伯樂たりし者は舅父故男安場保和にして、第二の伯樂たりし者を故伯兒玉源太郎とす。想ふに一の安場ありと雖も後の兒玉なくんば千里の駒(？)たる彼も果して能く顯はるゝを得たるやは疑問とす。然れども更に溯りて後藤の大恩人を求むれば、豈夫れ男石黒忠憲なるなからんや。後藤の相馬疑獄事件に坐して二三年間囹圄に繋かれ、出獄後間もなく日清の大役に會し、石黒の野戰衛生長官たるに及び後藤は石黒の部下に屬して衛生事務に執掌しき。石黒を助けたり。石黒乃ち彼の勤勉と才氣とを認め、戰爭後彼

を衛生局長に推薦しぬ。當時彼れ未だ重きを成さず省中綽名して『不衛生局長』『辨當箱』といふ、蓋し彼は衛生の事を知らず、又毎日携帶する辨當は一升も入るべき重箱大のものなりしを以てなり。斯くて兒玉の臺灣總督に任せられ民政長官たるべき者を物色するに際し、石黒は後藤を兒玉に推薦し、且彼の長處と缺點を告げて曰く、新平の缺點は才に任せて事を遣過るにあれど、足下能く之を抑制して其長處を取れば用ゆるに足るべしと。兒玉も外ならぬ石黒の折紙附なれば深く後藤を信じ、自分は單に盲判を捺すのみにして殆んど臺政を擧げて後藤に委し自由手腕を振はしめたり。彼が政治的勢力の基礎を造り華族に列し、私財を羸得たるも皆臺灣時代にして、即ち臺灣は後藤に取りて好箇の踏臺たりしなり。

彼は民政長官の時、既に國務大臣の自薦候補者となりて専ら勢力を扶植

するに努め、日露戦争後滿鐵總裁となるに及び、自ら無冠の滿洲王を以て任じ兼ねるに關東都督府顧問を以てして或ひは都督府の施設に喙を容れ、或ひは外務省を窺め私に大臣氣取りを以て居れり。當時滿鐵總裁の資格を以て露都に赴くや、我が對露外交の失策を探り得て歸來山縣及び桂に材料を供し、間接に西園寺内閣毒殺の應援を爲したり。蓋し彼の意、外相を叩落してアソ能くば外相の椅子を横奪するに在りしやも知るべからず。第二十五議會、彼の初めて國務大臣として臨むや、政友會議員の攻撃論難蝟毛の如く一身に集中し、流石の後藤も日夜天を仰いで長大息し、初陣の劈頭既に敗亡慘憺たる體たらくにて、彼の金箔は少くとも六七分方剝落し、鼎の輕重を問はるゝに至りぬ。

彼は總ての點に於て未成品なり、先づ政治家として未成品なる所以を見ん

か、其閱歴に於ては平田、大浦、小松原に及ばず、政治家としての實際の力量に於ても其優劣未だ容易に最後の判定を下す能はず、其大臣らしき態度貫目は寧ろ他の三子者に於て多く之を認むるも、後藤に至つては辭令態度の輕卒にして國家の重きに任ずる政治家の『デグニチー』を缺くのみならず、故ら變つた眞似をして場當りを取らんとする銜氣なきにあらず、或ひは頭髮を角刈にし、鼻眼鏡を挟み、或ひは反身になりて乙に氣取る處は稱氣満々宛として屬僚のハイカラなる者、何ぞ堂々たる大臣の形貌風采ありと謂はんや。彼が臺灣及び滿洲に於て大手腕を發揮したる如く認められしは黃白を自由に散するを得たるが故に、各種の人物を羅致し、由て以て存分の仕事を爲し得たればなり。臺灣鐵道又は南滿鐵道の經營は彼の誇りとする處なれど、畢竟彼の背後に長谷川謹介、村上彰一の如き影武者の潜めるありて彼の智囊となり、

兼て又實際の働きをなしたるが爲めにして、彼は金力を以て此輩を牽引したるに過ぎず。假に殖民地政治家として何程か成功したりとせば、开は自力よりも金力預つて多きに居る。

後藤の入閣は山縣、桂の勸説に依るにあらずして寺内の爲めに餘儀なく迎へたるの形あり。西園寺内閣の陸相たりし寺内は後繼内閣の成立と共に桂より重任の勸告を受くるや、寺内は重任の條件として後藤の入閣を持出したり。桂も後藤と聞きて才槌頭を傾けたれど、此要求を退くれば寺内を失ふの恐れあり、寺内を失ふは何よりも困れば、據處なく後藤の入閣を肯んせり。去れど遞信大臣にして鐵道院總裁を兼ね、更に臺灣にも滿洲にも餘力を延さんとするは後藤に取つて荷の勝過ぐるを免れざるも、彼は此大任に堪ふるが如く見せんが爲め、大風呂敷を擴げ、破綻を蔽はんが爲め人知れぬ苦勞を爲した

るらし。蓋し遞信省鐵道院に於ては臺灣滿洲の如く自由に黄金を散ずる能はざるのみならず、周圍には鬼千匹の姑小姑ありて新領土に於けるが如く唯我獨尊を極込む能はず。彼が檜舞臺に立ちて以來俄に體量を減じ、一時面上著しく瘦の見えしは實力に堪へざる重荷を負ひたるが爲めのみ。

彼れ常に大言壯語し、一見豪放にして膽氣人を壓するの風あるも、天質は極めて細心なり。毀譽褒貶を意に介せざる如くなれど、其實世間の批評を喜憂し、新聞を恐るゝ點は明かに彼の神經質たるを證す。旅行先に於て田夫野人と腕を把つて談じ、下級鐵道員の間に伍して往々驛員と見誤られ、或ひは鐵道工夫の負傷せるを病床に見舞ひたるが如き、其爲す處普通大臣と選を異にし如何にも豪傑の風あるらしけれども、斯くの如きは自然に出づるにあらずして芝居を爲すに過ぎず。蓋し彼は虎皮羊質の類なり、換言すれば豪傑の

假面を被りて人を欺き又自ら欺く者のみ。凡そ自ら装ふの巧みなる者は容易に尻毛を出さざるも、後藤に至つては豪傑を學んで未だ至らざる者、是れ彼を以て未成品と稱する所以なり。

山縣といひ桂といひ、其關係の範圍廣きを以て未だ世人の知らざる幾多暗面の秘密を有す。後藤は臺灣及び滿洲時代に於て彼等の弱點を抑ゆるが故に、山縣、桂も彼を如何ともする能はず。而して後藤も此二人者を崇拜し、一たび山桂二公の面前に出れば戰々競々として言を格み襟を正し、其柔和なる虎前に於ける猫の如く、人を人とも思はざる平日の後藤と殆んど別人の觀あり。蓋し彼の船を海に行る表面勇なるが如くして極めて用意周密、故に今にも暗礁に觸るゝが如くして其實巧みに之を避け、容易に危險を冒さるなり。從來彼の衝突したるは臺灣に於て石塚英藏、滿洲に於て大島義昌ある

のみ。而も此二人者は彼の位置に危険を與ふる程大なる敵にあらざるなり。彼と大浦との衝突は桂内閣の當初より世人の豫期し、其後も頻りに兩者の反目を傳へたれど、今日に至るまで形跡の見えず。蓋し遊泳術の巧みなる後藤は己の椅子を棒に振るが如き愚を爲さなければなり。

彼れ寺内内閣の參謀長を自期し、又他日總理大臣の自薦候補者たり。然れども彼は實力不相應の位置に在りて雷に言ひ過ぐるのみならず遣過ぐる嫌ひあり、何れの日か大失敗を演じ箔を剝がさんも測るべからざれば、彼の自惚るゝ如く果して政治的生命の永續するや太だ疑問とす。要するに彼は其人物の未成品なる如く、書も文も詩も演説も未成品たるを免れざるなり。

秋元興朝子

從來の貴族院は殆んど官僚黨の寄合ひといつても然るべきである。夫れも其筈で一體貴族院といふ處は頑固一徹の保守華族や、政黨嫌ひの古手官吏が多數を占めて居るのだから自然官僚臭味を帯びて、政黨主義とソリが合はない。夫れに死んだ伊藤でも山縣でも此議院政治といふものに成てから民黨の爲めに藩閥の牙城を打壞されて、如何なる辛い目に逢はされるかも知れぬといふ懸念から、其防禦策として腹心の徒を貴族院に入れて忠勤を盡さしめるべく、なか／＼骨を折つたものだ。此勅選議員といふ一團こそ官府萬能、藩閥擁護の思想を貴族院内に鼓吹したもので、殊にそれが山縣系の者に多い。處が世の中は年が年中南風の吹くものでない、幾ら別世界の貴族院でも時勢

に抗することは出来ぬ。といふ譯は議員の新陳代謝が行はれるに連れて天保鏡や文久鏡がすつこんで新學問新思想を攝取した所謂明治の人物がドシ／＼入込んで来るから、何日迄も頑固爺や保守主義の没分曉漢が我物顔にハッパる譯にもまゐるまい。反動的人物が崛起して官僚派の向ふを張るやうになり、追々政黨主義が貴族院に這入る様になつたのも、詰り時代が導いて此に至らしめたのである。

貴族院議員總數三百六十八名の中、研究會の七十九名及び茶話會無所屬の二團體より成る幸俱樂部九十四名は山縣系統で所謂非政黨主義一點張りて通さうとする手合である。其中で最も多數を占めて居る研究會は官僚派の中堅で、從來多數を恃んで暴威を貴族院に逞うしたことは尋常一様でない。尙友會と研究會は異名同體で、詰り尙友會は議員團體たる研究會の母體であつて

子爵議員の選舉は尙友會に依つて勝手氣儘にされたのである。彼等既に公然官僚黨を標榜せる以上、桂内閣に對して忠勤至らざるなく、又政府も彼等の爲めに種々の庇護を與へて居る。現に第二十五議會に於て桂は貴族院議員選舉規則を改正して尙友會及び研究會の爲めに利益を與へたなどは其一例である。彼等官僚派の恣睢暴横は近年に至つて反動的な思想を誘起し、茲に非尙友會同盟ともいふべき運動が實際に現はれた。第一は伯爵同志會である。

伯爵同志會は研究會から分離した議員を中心として組織された伯爵選舉團であつて、今まで子爵議員の外に伯爵議員の製造を一手に壟斷したる尙友會に取つては劈頭の大打撃であつた。同志會の中堅的人物は徳川議長の令弟達孝伯、腕白大將の隨一大木遠吉伯、宗重望伯、此間まで式部官であつた小笠原長幹伯等で、是等は政治上の經驗にこそ乏しいが、一番上院に暴れて見よ

うといふ少壯氣鋭の公達である。第二回の研究会脱會組 〓 これも尙友會や研究会の腐敗を憤つて上院革新を絶叫せる伯爵議員 〓 がある、曰く廣澤金太郎、曰く松木宗隆、曰く柳原義光、曰く柳澤保惠、曰く川村鏡太郎などの若殿原であるが、中にも廣澤、柳澤兩伯は前途有爲の少壯政治家として囑望されて居る。所が伯爵同志會も第二回脱會組も元々研究会が癩に觸つて謀叛したのであるから、主義感情も別に大した異同がないといふので、茲に合同して扶桑會といふ議員團を造つた。これと同時に少壯子爵の組織せる子爵談話會は愈々公然名乗を揚げて打つて出た。此談話會こそは真正面から尙友會に打つかつて一番貴族院の形勢を一變して呉れようといふ非研究会派の急先鋒で、伯爵同志會、扶桑會とも聲息を通じ恰も三角同盟の形がないでは無い。而して非研究会同盟の首領は事實に於て子爵界の元老秋元興朝子である。

秋元子は舊と上州館林藩主である。一體此秋元家は徳川の譜代であつて隨分幕府を佐けた者である。然るに維新の際、本來ならば朝敵になる筈の處を、秋元家は天下の大勢、順逆の理を察し、徳川家との私縁を捨て、尊王の爲めに瘁した功勞は格別であつた。であるから同家は舊祿纒に六萬石の小大名で有つたに係らず、其恩賞は十萬石以上の諸侯にも増した、其資産は大諸侯と略ぼ匹敵する位である。興朝子は幼少の時から聰明を以て聞え、長ずるに及んで才學いよ／＼勝れ、和漢の典籍は殆んど眼を通さぬものは稀なりといふ位、殊に保守主義の貴族に似合はぬ進歩主義の人であるから、帝國大學の文科を出ると直に英國に遊んでケンブリッジ大學に入つた。當時は華胄の高材逸足を簡拔して外交官に任じた時代であつたから、歸朝後の子は忽ち擧げられて全權公使となり外國に駐劄した。其他縉紳の公使としては戸田氏共伯あり、

鍋島直大侯あり、岡部長職子あり、長岡護美子あり、然れども鍋島、戸田二卿の如きは唯だ金の上の勢力が有つたといふ丈けで其人物、識見、學問は到底秋元子の比でない。子は程なく致仕して専ら政治、文藝の批評家として閑散な生活をするに至つたが、夙に子は政治上の抱負を懷いて常に時勢と接觸するを怠らなかつた。

元來子は趣味の廣い人で、政治、文學、哲學、美術、園藝について智識と意見を有し、古書刀劍の鑑定、園基に至つては殆んど黒人の壘を摩して居る。殊に相撲道に懸けては非常の通で、故近衛公、板垣伯と俱に貴族界の三好角家といはれて居る位のであるが、是等は畢竟隱藝で子の本領は矢張政治である。而して子の政治主義は頗る進歩して居る、故に藩閥者流の十八番である超然主義や官僚主義とは絶對的に相容れない。子は内閣の責任を明かにし、

憲政の運用を全からしむるには何うしても政黨を無視しては成らぬ。政黨は立憲政治に伴ふ必然の產物であつて、此勢力を度外視しては所詮民意を基礎とせる政治を行ふ事は出来ぬといふ意見である。故に貴族院にも政黨主義を輸入して一大改造を計らねばならぬ、然し是等の事業は到底保守頑迷の輩が蟠居して居ては行へぬから、新進少壯の士の手に行はねばならぬといふのが子爵談話會を發起した動機であらう。

伊藤の政友會を組織するや、子も入つて其一員となつた。貴族院議員にして政友會員たる者、兒玉淳一郎、岡内重俊以下八九名あるけれども、多くは新華族でなければ勅選若くは多額議員である。眞に華族にして政友會に籍を列する者は西園寺、秋元の二人である。子が談話會を起した目的は尙友會と同一の勢力を造つて貴族院に於ける勢力の均衡を得ると共に、選舉の偏頗を

匡正しやうと云ふにあるらしい。前にも述べた如く、研究会は極めて曖昧な團體で、社交團體とも見ゆれば、實際は政黨とも見える、或問題が起ると黨議を以て賛否を定めるなどは明かに政黨的行動である。而して其母體たる尙友會は政黨に加盟する者は選ばないといふ内規を設け、議員選舉に當つて自派の者のみを擧ぐるが如き專横も亦甚だしい、此の如きは憲法に依て與へられた互選權を藐視するものである。彼等官僚派に取つては談話會は勁敵に相違ない、然し何をいつても尙友會なり研究会なりは古い歴史もあり、殊に山縣系の中堅として牢く官僚政治家と結托して居るから、一朝一夕に之を倒して政黨主義の前に屈服せしむることは容易の業でない、然れども兎も角も秋元子の率ゆる子爵談話會は此の如く上院の惡閥を打破すべき陳吳と成つたもので、一時大に天下の同情を得て入會者も漸次増加したのである。補缺選舉

の初陣では尙友會に敗れたが、是は固より試験に過ぎぬ、目指す所は四十四年の總選舉である。尙友會はまだ多數を占めて居るが、非官僚派の同情を失ひ、又世間識者の指彈する所となつて、形勢は非であるから、之が黒幕筋は餘程氣を揉み出したらしい。當時後藤が秋元子を訪ふて尙友談話兩派の調停を試みたといふ事も、後藤一個の考から出たのだといつてゐるが、實は官僚政治家が苦心の餘り旨を後藤に含めて遣らした藝當かも知れぬ。

談話會は殆んど秋元子の物といつても好い、成文的の主義綱領を發表しながら、既に選舉を目的とする社交團體たる以上は事實に於て『默認せる政黨』といつても好い。秋元子が政友會員である所から、談話會を以て政友會の一枝隊の如くいふ者があるイカサマ無理ならぬ推測である。現に談話會は政友會に反對しないといふ不文的條件があつたとも傳へられた。尤もな事で子も

同會が之に反對する様では世話を仕兼ねるであらう。秋元子は資産もあり、學識もあり、又政治上の功名心も大にあるらしい、が惜しいことには蒲柳の質で、政治上の大活動を爲すに當つて子の健康が續くか否かを憂ふる者が多い。けれども既に馬を陣頭に進め、背水の陣を布いて懸つたことで有るから、大に遣る決心らしい、又一方の尙友會研究會でも對抗策を講じるから、此二箇の勢力が上院の分野に於て相争ふ武者振こそ政略の觀物であらうと一般に期待した。けれども尙ほ官僚派の旺盛なる今日ゆる總選舉では全然一敗し、遂に無言の解散を行ふの餘儀なきに至つたのは是非もない。

堀田正養子

堀田正養、岡部長職、正親町實正の三人は一切り鼎足の勢ひをなして研究會を操縦統率したが、其中でも堀田は最も勢力もあり、手腕もあり、乾兒も相應に多かつた。岡部は泉州岸和田の殿様で全權公使、東京府知事、外務次官さては大臣といふ風に、可なりの位置に進んだ男だが、ナニサマ根が狂氣じみて酒を飲めば管を卷く、拳骨を振廻す、あの大きな圖體だから、腕力はなかく有るけれども、其割合に智恵は廻り兼ねてどちらかといへば先づボンクラに近い代物だ。正親町は京都の貧乏公卿で頭も腕もないが、至つて正直者で官僚派の手先になつて長年働いた御褒美に賞勳局總裁の一職を得た。此三人の中では何といつても堀田が第一の智恵者で膽魂もある。

正親町は、シミツタレで、狭量で、逆も首領などに成る柄でもないが、後の二人の中いづれが首領らしいかといふと、堀田よりも寧ろ岡部の方を推すものが多い、といふ譯は岡部は茫として要領が何處にあるかと思はれるやうな人物で、何となく大きい處があるのかも知れぬが、堀田は華族に似合はぬ飛上り者で、世間の情偽にも通じて喰へない處もある。岡部は容貌風采堂々として押出しも好く、家に居ても常に紋附の羽織を附けて、如何にも華族の態度を存し居る。それに邸宅を一見しても敢て立派といふ程でもないが、併し一體の構へが華族の屋敷らしい。これに反して堀田と來ては被布が何かを着け、ダイヤモンド入りの指環の一つも箝め、金煙管を横啜えにして、軽い調子で話す具合などはチョイト意氣で、何となく相場師染みた處があつた。堀田が研究会で勢力があつたといふのは、彼の人格を崇拜して其麾下に集つ

たのではない、ツマリ彼には親分肌の面白い處があつたために自ら人が寄つて來たのであらう。

彼は江州邊の一萬石か二萬石かの小藩主だから、無論岡部に比すれば大の貧乏である。併し彼は何處からか金を引張り出して來ては研究会の議員中ピイ〜いつてる者に金を呉れた、洋服のない者には自ら洋服屋に紹介してやつて代金は先方の知らない内にソツと拂つてやると云つたやうな道口である。議員の改選にでもなると随分乾分の爲めに骨を折つたもので、岡部や正親町には眞似の出來ない俠氣があつたから今の研究会や尙友會にゴロ〜して居る貧乏華族で堀田の世話を受けたものは少くない。現に三島彌太郎今では研究会の實際の首領とまで唄はれて頗る羽振りは好いが、以前議員に成立てのホヤ〜は一方ならず堀田の世話に預つたもので、三島の今日あるは堀田の

庇陰おかげといつても好い位くらゐである。それから華族破落漢こつぎと綽名あだなさるゝ稻垣太祥いながきなどはいつも堀田から臺所を賄まかつて貰もらつた男で、堀田の全盛時代には恰あたもダニのやうに喰く付ついて居たものであつた。今日は研究會の常務委員じやうむゐんとまでなつて威張おどろつてゐる酒井忠亮さかゐ、牧野忠篤まきの尤なほも是等は稻垣や松平直平等まつらとは違ちがつて新智識ちしきもあるし、孰たゞれかといへば研究會中上玉ちゆうじやうたまの部類ぶるいに屬まする方はうだが、これも矢張堀田の引立ひきたてで今日までになつたのだ。それに何どうぢや、堀田の勢力が傾かたきかけて來くると寢返ねがへりを打うつて了しまつた。

堀田が研究會の政敵せいとくたる秋元子の談話會だんわかいと聲息せいそくを通とじたといふ廉かどを以もつて、研究會の幹部かんぶが決然けつぜん彼を打首うちくびにすると、堀田は大に其不條理ふじょうりなるを争あらそうて頑張がんぢやうつても見たが、とう／＼泣寢なきね入いりに終しまつた。一時彼は中立團體ちゆうりつだんたいを組織そくしして大々的に宣言せんげんを發表はつぱつするの豫告よこあきまでして見たが、これも立消たちぞえになつて、い

つの間まにやら子爵談話會しやくだんわかいに入いつた。堀田の白髮首はくはつしゆを斬きつた張本人ちやうほんにんは桂と清浦の二人で、表面首切役くわいせきやくを務めたのが三島彌太郎みやまと其後清浦の推薦すいせんで東宮大夫とうぐうだふになつた波多野敬直はたのとである。桂と清浦の目から見ればこれまで自分じぶんの島しまのものと思つて居た堀田が、不圖ふと西園寺や原敬はらに誘いざなはれて遞信大臣ていしんたいじんとなつたのであるから、餘あまり快こく思おもつて居ない處へ、政友會せいゆうかいの人のやうになつて談話會だんわかいと通とじたとあつては愈なほ々なほ以もつて業腹ごうはらに堪たへぬ、彼等が此位こののことをするのは當然たうぜんかも知れない。然しかし本來ほんらいからいへば三島、酒井、牧野等は命いのちに代かへても思おも人の爲ためめに命乞いのちこひをすべき筈はずであるのに、桂や清浦の手先てつかに使つかはれて首切役くびせきやくを勤つとめたなどは如何いかにも沒義道もつぎだうな仕方である。處ところが堀田も少し己惚おぼれ過ぎた傾かたきがないでもない。一たび自分じぶんが足を揚あぐれば二十三十は雜作ざさくなく附ついて來きるものと思おもつたが、ドツコイ爾さうは問屋もんやで卸おろさず、まるで獨ひとりぼつちで、

昔の乾兒等は障らぬ神に祟りなしといった様な形となつた。一寸犬養の眞似をして見たのだが、幾ら偉いといつても矢張り殿様ぢや、芝居の打方が如何にも手際が悪い。第一犬養とは役者が違ふ。

談話會に入つたものゝこれは院外團體だから、止むを得ず貴族院では無所属で居たが、堀田が物の十人と土産物を持参しての上なら歓迎もしようが、關博直、梅小路定行、松平忠禎と揃ひも揃つた貧印の安本丹議員三名位では談話會でも扶桑會でもチャホヤいふ譯はない。一時堀田は不遇の位置に居た、尤も彼奴のことだから何とか勢力を盛返して、アワ好くば再び西園寺内閣の一椅子を獲たい野心を持つて居たらうが、一旦下坂になつた勢力を元に引上げようとするのは餘程の放れ業でもすれば格別、さもなければ一寸困難であらう。其中に病氣になつて死んだが、何だか振つたやうな振はないやうな末

路であつた。

河島盤谷

薩閥後進中の高材にして夙に臺閣に列すべくして終に列し得ざる者二人を數ふ、一は會計検査院長田尻稻次郎にして一は故河島醇とす。嘗て河島の大藏省に在るや、其學識手腕嶄然として儕輩を抜き、嘗に薩閥のみならず、長閥の人と雖も、河島の前途に大なる望を囑し、或者は彼を以て松方の後繼者なりとまで期待し、彼れ自身も亦任ずる所頗る大なりき。然るに事は豫期に反して昇進の見るべきなく、嘗て彼と田尻は俱に大藏次官の候補者たりし

も、お鉢は河島に廻らずして田尻の有となれり。是に於て彼は衷心快々として樂まず、加ふるに大臣松方と議合はず、終に致仕して野に下り、籍を民黨に置けり。

元來彼は獨逸の學派を奉せる國家主義者なるに、一朝佛蘭西式の自由主義に轉じたるを以て、民黨の一部は彼を疑ひ、政府の密命を含んで民黨を攪亂する者なりとしたるが如し。彼が彌生館に於て演説の真最中、遠藤秀景の部下より一刀を背部に浴せ懸けられたるも之が爲めなり。第一議會の時彼は鹿兒島民黨の驍將として議席に列し、藩閥攻撃の急先鋒となり、遼東還附問題に對しては鼓を鳴して伊藤の失政を彈劾し、河島磐谷の名は時の政界に重きをなせり。然れども彼は官吏としての天分を有するも黨人としては飽まで不適當なるが上に、政治運動の爲めに負債に苦められ、再び松方の門に降りて

經濟界に入り、更に一轉して地方官に下落するの已むを得ざるに及ぶ。

彼は性急にして雍容迫らざるの襟懷を缺き、常に議論を好んで疾言遽色し、交綏調和の才に乏し、曾て獨逸にありし時も、大藏省にありし時も、朝より夕まで談論を上下し、地方官としても各地に於て屢次衝突せり。彼の剛愎と議論癖には松方も持餘して數次戒飭を加へたるも、彼は少しも用ゐず、果ては松方にも喰つてかゝれり、蓋し彼の天性として到底巧みに官海の暗礁を潜りて游泳する能はず。是等は彼の系統、閱歷、才幹、學識を以てして終に大臣の椅子を逸したる所以にあらざるか。

然れども彼は廉吏の典型なりき。從來知事としても個人としても、未だ嘗て人格上の非難を受けたることなし。殊に久しく伏魔殿として知られたる北海道の刷新に任するや、前長官園田安賢時代の腐敗を摘發すると共に、羽織

破落漢、土地喰を征伐して一步も假さず、歴代の長官中彼に於て最も治蹟の
擧るを見る。晩年稍々圓熟の境に入りたるも氣力尙衰へず。議會に於て北海
道代議士と火花を散して争ひ、地方官會議に臨みて忌憚なく侃諤の辯を揮ひ、
若朽者をして後に睡若たらしめ、常に一個の老壯士を以て任じたるが如し。

鳩山和夫

政治上の綱節漢として一世の指彈攻撃を受けたる者未だ鳩山和夫の如く太
だしきはなし。若し變節を論ずれば嘗て板垣に背きて後藤に奔りたる大石の
如き、進歩黨に居て竊に伊藤と握手したる尾崎の如き、民黨より閥族に柄か

されし柴四朗、竹内正志の如き孰れか然らざらんや。然れども鳩山は進歩黨
の對二十四議會策を定むるに當り、其領袖の一人として黨議に興りながら、
之より先き既に政友會と密約を結び、咄嗟に後砂を蹴りたるが如き裏切的の
遣口は公人の出處進退として公明正大を缺きたる憾みあり。

由來鳩山は節義名分に拘泥せず、去りとして、餘り惡辣の手段に出でざりしも
自己の名利を實現せんと欲する場合は頗る融通の利く人物なりしが如し。外
務省翻譯局長たりし時、外相井上馨に依て通顯隆達を求めんとしたるも、井
上が條約改正に關し、輿論の反抗を受けて其職を退き、伯大隈の之に代るや
忽ち其幕下となれり。憲政黨内閣の時自ら外務大臣を以て擬したるも、終に
次官以上に出づる能はざりき。蓋し憲政黨内閣の脆くも寂滅を遂げたるは官
僚分子の惑亂、自由進歩兩系の根本的不調和にも因れど、直接の原因は兩黨

の権衡問題にあり。然れども初め内閣の役割を定むるに當りて自由派も敢て異議を口にせざりしが、鳩山は内閣の一椅子を獲ざりしを以て不平に堪へず窃に自由黨に行きて閣員分配の頗る不均等なるを説き、暗に自由派を使喚すると共に、進歩派に向ても雑つ返しを試みたり。是に於て黨派心の強烈なる板垣は先づ苦情を持出し大隈は肝癢を起して組織中止を唱へ、犬養等の居中盡力して漸く内閣は出来上りたるも、後に至りて再び均衡論の爲めに内輪喧嘩を始め、終に折角の政黨内閣も一場の夢と化し去れり。

若し鳩山にして續いて進歩黨に在らば改革派の首領たるべき一人ならん。蓋し彼は自己の勢利の爲め進歩黨の勢力を増大して順境ならしむるの必要上、改革派の前身たる萬安組及び山月組に擔がれ、或は大隈の退隱を餘儀なくし、或は消極主義より積極主義に變じて閥族政治家の意を迎へんとしたる計畫者

の一人なればなり。大石も之に賛成したる一人に相違なきも、公然改革派の首領に擔がれたるは鳩山が政友會に鞍替したる後にあり。今日彼を是非するは死屍に鞭つの嫌ひあれど、有體にいへば憲政黨内閣を破壊したる者も、進歩黨紛擾の起點も共に鳩山なりと謂はざるべからず。

鳩山が大隈部屋を脱して西園寺部屋に轉じたる裏面には未だ世人の知らざる事實あり。最初原敬は入閣の條件を以て鳩山を誘ひたるに、彼の意忽ち動き、少くも三十名の道伴を得べしと答へ、先づ大石に諮りたるに、大石は三十名は恐か場合に依ては一黨を擧げて政友會に行くも可なりと大きく出でたれば鳩山は抵掌して喜び、郎黨を自邸に招きて相談會を開けり。木下謙次郎の之に加はらざりしは未だ彼等より驅使さるゝ下廻りに過ぎずして重きを置かれざりしに因る。

當時春子女史は婿君の身に繋る重大事なれば、妾も會議の席に列せんといひ出るや、鳩山は婦人の關知する所にあらざれば退り居らうと頗る睨みの利かぬ光秀を極込み、漸く乾兒の執成に依り一言も啄を出さぬといふ條件にて列席せしめたり。而も女史は何條黙して止むべき、嘗てエール大學の同窓たりし者の皆政界に志を得たるを説き、郎君一たび節を破るに於ては大臣たるの機會を永遠に失するのみならず。米國の學友に對しても面目を墜す所以にあらすやと妻の操もどきに諫止し聲涙併び下る。政友會に於ても進歩黨全部では大石も犬養も大臣にせざるべからず、是では荷が重過ぎるとて拒絶したれば政進合同談は立消となりなき。然るに其後重ねて政友會の策士より鳩山に釣を掛けられたれば、彼は四十一年の常議員會に政進合同の議を提出せり。固より事の行はれざるは百も二百も承知なるも、唯だ脱會の口實を造る爲めに

過ぎざりき。

彼は大石と親善にして、犬養とは悪かりしといふも、多くは小策士の爲めに離間されしのみ。然れども大石は常に彼を慰撫して其計畫を抑へんとし、犬養は條理に依て之を防ぎたれば多少犬養を煙がりしは事實なり。衆議院議長としては其法律の知識ある、從容として物に動かざるの風ある、議場整理の呼吸を解せる何人も其手腕を認め、昨年議長選舉に當り、容易に人を褒めざる、犬養と雖も其適任なるを稱せり。彼は常に小野心を有する議員を世話して腹心とするの手段を執りたれば、或場合に於ては乾兒あるらしく見えしも、畢竟互に利用せんとしたるに過ぎず。故に彼の政友會に奔るに當りて一人の彼と進退を俱にせし者なく、漸く福井三郎の一年を経て後を趁ひたるのみ。而して政友會に於ける最初の鳩山は新參者のことゝて何程か遠慮せし

も、原敬、岡崎邦輔との關係上、關東派の後援を有する形なきにあらず。加ふるに衆議院議長、外務次官の閥歴あり、米國の法律大博士、日本の法學博士といふ肩書ありたれば、人物の少き政友會に在ては首領株の一人に數へられ、他日政機大變轉の時を待ち、年來の希望を達せん考へを以て、易めて謹慎の態度を執れり。若し彼にして生存せば、第二次内閣の一員たる殆んど既定の事實なりしに、組織の間際に及びて易質したるは遺憾の極みにあらずや。

社會道德の破壊者

一世の風潮は節義德操を輕んじて、一に金權と人爵を重んじ、金權と人爵を有する者亦之を善用して善良なる社會の風紀道德を破壊す。而も制裁の力微弱なる之を尋常一様視して怪まず。英國一代の名士サー、チャーヤルス、チルクは一婦人との關係の爲めに政治界よりも社交界よりも排斥せられ、其雄辯宏辭も椽大の筆も權威を失ひて門前忽ち雀羅を張るに至る。乃ち知る國民の人格は制裁の嚴なると否とに依て優劣の別を生ずるを。

ポーツマスの一敗、國民の愛國的熱情は最高潮に達して血管將に破裂せん許りに憤慨せる時、宰相桂太郎は市民の生命財産よりも一賤業婦お鯉を重しとし、警察官をして其邸を護衛せしめ、幾多良民の毒刃の爲めに傷けるを顧みず、恬然として痴體を演じき。而も痴漢太郎は兩三年を出でずして再び臺閣に立ち、其功を以て公爵に陞れるにあらずや。曾て強姦罪を犯したる大

石正巳、姦通事件の爲めに醜名を流したる角田眞平、詐欺取財の爲めに政黨の籍より名を除かれたる中村彌六、若し彼等をして英米人たらしめば當然社會的自殺者たるを免れざれども、幸ひ日本に生れたるが故に今も尙公人として存在し、又大倉某の如きは私腹を肥さんが爲めに金品を官吏に賄ひ、百端の不正手段を講じて國庫の金を貪りたる奸商なるも、傲然貴人の間に伍し、金權を以て男爵を嬴得んと試む。唾棄すべきなり。

今日身を官場に置きて私財を造れる者多くは其職を利用して不正を働きたる公盜のみ。山本權兵衛、山内滿壽治、野田豁通、西村靜一、後藤新平、渡邊千秋の如きは即ち其尤なる者、若それ小盜に至つては更僕するも未だ終すべからず。其他財界に於ても學界に於ても其行實の陋劣にして人間羞恥の念なき者少からず。唯だ表面顯はるゝの稀れにして隠るゝの多きも、社會の道

徳を蹂躪し、善良なる風俗を壊り、恐るべき害毒を流しつゝあるの一事は尠はんと欲するも得ざるなり。

伯田中光顯の人格は世既に定評あり。目白の邸第、岩淵の別莊は建築壯を極め美を盡して生活の豪奢王侯に類す、斯るは正當なる勞力の賜物にあらずして皆宮内大臣時代に獲たる不淨財の力に因る。嘗て至尊の命に依りて韓國に使ひするや、彼は或る手段を以て韓皇室の寶物を手に入れ何喰はぬ顔して歸りたれど、終に事發覺して世の物議を醸しき。單に此罪惡のみを以てするも士君子の列に入るべき人物にあらず。況んや白頭豁齒の身を以て不自然なる結婚を行ひ、而も其暗面には幾多の忌むべく恥づべき事實の存するをや。結婚は人生の大事なり、年齢相若ける男女といへども性格の異同より婚後に不祥事を生ずるの例少しとせず。殊に夫たる者の老て妻たる者の尙妙齡な

る、嘗に琴瑟相和するの難きのみならず、天の定めたる結婚の原則に反する者にあらずや。小林孝子が青春の身を頽齡の田中に委したる、固より現代婦人の通有弊ともいふべき虚榮心に驅られたるものにして、其淺慮寧ろ憐むべきも、求むる者ありて初めて應ずる者あり、孝子とても我れより進んで爾したるにあらず、田中之を熱望したるが爲めなるべしとせば、此非倫なる結婚の罪は主働者たる田中に歸せざるべからず。而して彼の孝子を得んとしたるは唯だ絶世の美貌に打込みたるのみ、言ひ換ふれば一家の主婦としてにあらずして性慾を満足せしむる爲めの器械たるに外ならざりしなり。縦令此結婚の不自然なるにもせよ、眞に伉儷の道を守るの意あらば、閨閣を修めて一家の調節を計ると共に、直ちに宮内省の認可を得て入籍の手續をなすべき筈。然れども由來動物性にして徳操の何なるを解せず、今日に至るまで彼の

爲めに婦節を汚されたる良家の少女尠からざるを知らば、一孝子を守る能はずして閨門の醜態依然たる何ぞ怪むに足らんや。

伯爵夫人を夢みたる孝子は名は嫡妻なるも實は一賤妾に異ならざるを見て滿幅の虚榮心は日と共に減退し、田中も亦愛情日に衰へて一痕の秋風終に破鏡を吹くに至れり。彼女が徒に虚榮に憧憬して其生涯を誤りたる固より自業自得といふべきも、處女の節操を弄びて社會道德の上に悪影響を印したる田中の罪亦大に悪まざるべからず。彼れ田中は某々投機師に欺かれて、私産爲めに大缺陷を生じ、本邸別墅俱に他人の手に委せんとすと傳へらる。若し眞ならば是れ積悪の餘殃にして唯だ己を怨むのみ。

長人中の非長人

雪嶺博士曩に拙著『五大閥』に序して曰く、新人物を求むる聲の盛んなるは閥の盛んなるに反撥せる者にして、愈々新人物を求めざるを得ず、何處よりか新人物の出で、少しにても閥を破らんこと切に希望すべき處とすと。近者日本の總ての社會を通じて新の字の盛んに流行し、往々にして無意義に使用せらるゝの嫌ひなきを免れざれど、實は無意義の中に自ら深甚なる意義の潜むを見ずや。明治も既に四十五年となり、國家の位置は世界的に進みたりといへど、内を顧みれば朝野俱に尙ほ狹隘なる私我的觀念に囚はれ、國民の自惚るゝ程に統一的進歩の著しきなく、現に方面に依ては依然として封建的舊

態に停止するあり。單に外形のみ長足の進歩を遂げたる如くして、事實は却て退歩せるあり。凡そ事の何たるを問はず、進歩は新陳代謝を速かにするに出で、新陳代謝の行はれずして一に固定するに任さば、遂に退歩の避くべからざるに及ぶ。

今や我邦の官場は固定せざるか。財界も學界も固定せざるか。此十年間政柄を乗る者は桂公にあらずんば則ち西園寺侯にして、其下に擧用せらるゝ時の百執事亦た皆桂なり西園寺なりの配下に屬し、未だ新人材の進見を求むるなく、二老亦た天下の賢を見るに急なるあるを聞かず。財界に於て何事の起るも表面飛出す者は澁澤、豊川、早川の屬に限られ、問題異なるも人同じといふの實狀にして、斯る舊人物の勢力を占むる以上、新人物の表面に立つべき機會なく、少壯者も進んで機會を造らんとはせず、無用の遠慮氣兼をなして

老物の跋扈を看過し去るの常なり。比較的新智識新思想に接觸して之を注入するに努むべき學界の如きも、老人の出娑婆りて少壯者の退嬰に傾くの嫌ひなからず。而して政府なり民間なりの陋弊を破り、一國の風氣開發を以て任とすべき筈なる政黨も亦た歳と共に活氣銷沈し、嘗に社會の陋弊を救はんとせず、却て其弊に感染し、前に彼等を攻撃したる舌を以て今は自らを攻撃せざるべからざるの餘儀なきに及ぶ。政黨の狀態斯くの如くなる以上、議會に權威なきは當然のみ。總選舉の結果、議員は三分の二の新陳代謝を見られど其新議員とて孰れも變り榮のせざる山家育ちとすべく、進んで時弊を匡救するに堪ふるや疑はし。水も長く一處に停滯せば遂に涸濁して子々を生ず。總ての社會を見よ、到る處ろ惡水漲り、無数の子々は時を得顔に游泳しつゝあり。是に於て天下の人心固定の久しきに堪へず、打舊一新を思ふは自然の傾

向にして、今日「新」の字の流行する畢竟反動の一端を示せるのみ。

二

凡そ社會の不良勢力を打破するの途二あり。一は幾多の新人物輩出して外より之に當り、二は不良勢力圏内より反對者の崛起し、内外相呼應して迫るにあり。我邦不良勢力の根本ともいふべき藩閥は今少く政黨の力強ければ之を打壞する敢て難事とせず、唯だ政黨の無氣力なる、大警を忘れて報せず、垢を含み恥を忍び、其膝一たび屈したるが故に、十年前既に抜くべかりし閥族の城壘をして今日に至らしめたるのみ。尤も藩閥の嫌ひは依然存するにせよ、纔に餘勢を保つに過ぎざれば、其覆滅は畢竟時の問題に外ならず。斯く藩閥力の歳と共に衰頹の避くべからざるに至れる、藩閥其物が不良勢力を極端に亂用したると、時代の推移に餘儀なくされしとはいへ、抑々亦た新人物

の出で、外より之を破るに努め、同時に内よりも異色ある人物の抗起して、
を向けたるあるに因らずとせず。現に薩人にせよ、長人にせよ、少壯の士は必
ずしも先輩の言爲に甘從せず、寧しろ新時代の要望に適應せんことを念とし
つゝ私我的結合を呪咀し、將來更に自覺せる新人の頻々出現するに至るべ
し。斯くて多年朝野に龍蟠虎踞したる不良勢力は外よりする力を待つまでも
なく、寧しろ内より解體せんも知るべからず。

閩人にして始めて閩外に逸出し、鋒を倒まにまして起ちたるは長の三浦梧
樓なり。彼れ進歩黨の客將となり伯大隈と提携して政界に獅子吼を試むるや、
長人の爲めに反逆者視せられ、彼の莫逆にして交を絶ちたる者も少からず。
前年樞密顧問官に任せらるゝや、人皆な彼を以て終に再び山縣に囚へられた
りとし、其晩節を惜みたれど、彼としては相當の理由あるが如し。三浦の形骸

は山縣系の奥の院たる樞府に横はるも、精神は三浦より離れず、言ひ換ふれ
ば衣食の資を得る爲め止むを得ず衣冠の人たるに過ぎずして、其氣分は從來
の浪人時代に異ならず。故に彼の舌は相變らず非山縣、非桂、非寺內的なり。
其交遊する處のものは官府の人よりも在野の志士、論客、浪人の仲間によく
而も行動の無遠慮なる、時として樞密顧問官に有るまじき不謹慎を敢てす。
現に昨秋東京市の衆議院議員補缺選舉に際し、浪人相會して古島一雄を候補
者に推すや、三浦も之に列して大に氣焰を吐き盛んに彌次り、果は演壇に驅
上りて推薦演説をなし、推薦狀にまで署名したり。本年の總選舉に際しても
表面名を出すを避けたれど、裏面に於て二三子の爲めに援助を與へたり。而
も其二三子は孰れも長閑の精神と相容れざる、革命黨式の浪人なりと謂はず
や。惟に之れのみならざるなり。彼は三宅博士を主筆とし、閩族官僚の一敵

圖として知らるゝ『日本及日本人』誌上に、屢々放膽無諱の談論を公けにし、又政教社の新年宴に臨むや、自ら起て奇抜なる裸踊を演ずることあり。

蓋し三浦は天性の彌次り屋なり、電車焼打ち警察焼拂ひ騒動の時の如き浴衣掛にて彌次馬の間に伍し終夜家に歸らざりき。當時彼は首相柱の振舞を以て不埒千萬なりとし、親分たる山縣に談ずる處あらんとし之を椿山莊に訪ふや、家扶立關に出で、公の不在なるを告ぐ、更に其行先を問へば不明なりと答ふ。然れども實は危険を懼れて一室に潜めるなり。三浦は之を知るが故に態と開えよがしに大聲疾呼して曰く、今や輦轂の地騷擾して戒嚴令を布き軍隊を繰出すに至る、容易ならざる秋なり。身陸軍の元帥たる者其行く所を知らざるが如きは何ぞや、主公歸邸せば三浦梧樓護衛に罷り出でたりと傳へよと。彼今日も繩暖簾を潜るを樂みとす。一日之に行かんとしして電車に乗る、

満員にして車掌は爲めに忙殺せられ、荐に客の切符を迫るに對して『四本も五本も手がありません』といふや、彼れ傍より彌次つて曰く、『手が四本あれば怪物だい』。斯くの如く長人臭味を帯びざる氣分は明かに言爲の間に顯はるるも、彼は已に舊時代の人物にして到底目覺しき活動を期待する能はず。唯だ「閥族に反對したる閥族の先驅」として明治政史に録すべき一人なりといふに止め、茲には長人中の非長人を代表せる快男兒の最たる者として冷灰江木衷、照山佐々木安五郎の二人を數へんと欲す。

三

江木といひ、佐々木といひ、其名を世間に知らるゝの久しく、殊に江木は齡既に五十を過ぎ、官吏としては今の次官局長等よりも遙に舊く、辯護士としても亦先輩の一人なれば、普通の意味に従へば舊人物にして新人物といふ

の當らず。されど彼は尋常人の爲し得ざる處を口にし實行して固定沈衰せる今の社會に何等かの新生命を附與するに努め、常に世人の記憶に留まり、其存在の有意味なる點に於て新人の名を冠するに堪ふ。佐々木は漸く不惑に達せる男盛りにして現狀を打破するに註文向の人物なれば、若朽者の多きに苦める現代には恐らく最新の部類に屬すべし。此二人者の類似點を求むれば、第一は陰險多智なる長人の通有性より蟬脱し、其性情の如何にも豪放濶達にして毫も術策を挾むが如きなく、一言にして盡さば、「氣心の分りたる愉快なる人」として何人も親昵するにあり。第二は文章に巧みにして其意見の卓抜奇警なる猶ほ其人の如くなるにあり。第三は弱者に同情するも、強者に對して反抗力の勁烈なるにあり。第四は彼等の先輩が築造せる官僚政治を進歩の敵として極力打壊せんとするにあり。江木は始めより一定の職業を有し、相

當の資力あるも、佐々木は年百年中素寒貧の浪人なり。前者は學閥の出にして法學博士の稱號を有するも、後者は官私いづれの學派にも縁故あるを聞かず。佐々木の才は表面に流露せるも、江木は其七分を内に藏し餘の三分を外に示せり。故に佐々木の言ひ且つ行ふ處は頗る陽氣にして衆目を牽くに足るも、江木は潑刺たる野武士的氣魄に乏し。是れ二者の異なる點なるも、長閥の産出したる多數の人物中珍品たるは一なり。

江木の帝國大學に在るや、貴族院議員奥田義人、横濱市長荒川義太郎、前司法次官石渡敏一等と級を同うし、明治十七年第一位を以て卒業するや、郷先輩にして時の外務大臣たる井上馨は彼を外務に用ゐんとしたるも、彼は自ら望んで薩人の巢窟たる警視廳に入る。時の總監は三島通庸にして大浦兼武の如きは官纒に主事に過ぎざりき。當時薩長兩族は權力爭奪に腐心して反目

したれば、長人たる彼は忽ちにして外務に引取られ、幾許ならずして農商務省に移り、後ち司法省参事官にして東京地方裁判所検事を兼ね、二十五年故品川彌次郎の松方内閣に入りて内務大臣となるや、品川の請に依り内務参事官を以て秘書官を兼ね、當事の秘書官は今日と異りて一省の樞機に與り、大臣を輔翼し、次官局長を壓するの勢力あり。況んや江木は長閑の寵兒にして且つ大學の俊才たりしをや。往復課長たりし山縣伊三郎、警保局長たりし大森鐘一の如きは之を呼棄てにし、地方官中彼の前に頭の上らざる者も多かりき。憲法史上に一大汚點を印したる選舉干渉の發頭人は無論品川及び次官白根專一なれども、江木も亦た始めより謀議に加はり、民吏兩黨の争ひ最も劇甚なりし高知縣に出張して知事調所廣丈以下の縣吏を指揮し、身の危險に瀕したること幾たびなるを知らず。

四

閥族政府は官場一般の輿論に餘儀なくせられて斯くの如き野蠻政策に出で、江木も亦た官に衣食したるが爲め已むを得ず政府の兇暴を助けたるも、翻つて考ふる時は坐に良心の苛責に堪へず。さらでだに役人嫌ひなる彼は親しく政府の實情を目撃するに及びて益々厭忌し、選舉干渉問題の落着を告ぐるや、決然致仕して野に下り、夫れ以來數次勸誘を受くるも、再び官卓の人とならずして今日に至れり。彼れ其著書に述懐して曰く、想起せば余は政府の大妄斷を確乎不拔の理論として政略的の御用を勧めたる時代もありたれど、時態は已に一變したり。花天月地の興盡き、羅浮蓬萊の春にも飽きたり。唯だ且暮念頭を離れざるは五千萬の行末なりと。半生の非を覺れる彼は官僚政治の宿弊を除き、國民をして眞に憲法治下に置かざるべからずとせり。

近時彼の主張する陪審制度も畢竟此精神に胚胎し、昨年議會の問題となりしは弟子分たる政友會議員松田某に意見を授けて之を提案せしめたる爲めにして、松田の提出理由なるものは悉く江木の受賣論なるのみ。陪審制度の是非及び實行の能不可能は別として彼の熱心は多とすべく、嘗て山縣を小田原の別荘に訪ひて切論四時間に亘り、其他筆に、演説に、坐談に此事に論及せざるなし。蓋し彼は陪審制度を以て『今吾の冷灰が故吾の冷灰を攻撃し、醒後の冷灰が夢裏の冷灰を非難するもの』とし、且つ曰く我れ先づ過を改むる以上、嘗て彼と共に空理空論場裏に角逐し妄斷したる學者、親友、先輩も亦た宜しく國家民人の爲めに悔悟せざるべからずと。意は溢れて言外にあり。『冷灰漫筆』『山村夜話』及び『陪審制度談』の三篇は元と閑文字に過ぎるも、具に翫味すれば閥族の罪惡暴露にして又長人ならざる長人の告白とも觀るべし。

法律學者としては夙に刑法の翹楚にして、刑法汎論、刑法各論の二著大に世に行はる。されど彼は法理一片に拘囚せらるゝ學者にあらず、又法律を賣物にして一身一家を利する曲學家にあらず、故に法律を知るも之を活用する能はざる者を死學者と罵り、殊に穂積某の曲學的憲法論は其最も嫌忌する所なり。而して治國の要は獨り法律のみならず、經濟、文學、宗教をも知らざるべからずとし、之に關する意見亦た聽くに足るものあり。彼の多趣味なる西歐の文學を精讀し、漢籍に通じ、詩を能くし、冷灰の名漢詩界に嘖々たり。近者政府の文藝協會の『マグダ』劇を禁止するや、彼は直ちに『マグダ』に現はれたる道徳に關して一文を都下の某新聞に寄載したり。彼は欣々女史を娶りて以來、伉儷相和して紅燈綠酒の遊に遠かれるも、嘗ては酒豪として豪遊家として風流才人の名高く、選舉大干渉の際土佐に出張するや、反對黨の壯士

と旗亭に置酒し、或ひは内務大臣に發する報告電報は悉く都々逸の文句を以てしたるが如き、今も尙有名なる話柄として官場に殘れり。

長州人の職を求むる者江木を訪ふて山縣、井上、桂等に紹介状を認めんとを依頼するも、彼は決して肯諾せず。蓋し國家に有益なる事業をなす者の爲めには多少の資を寄附するを吝まざるも、藩閥の力に頼りて好位置を得んとする者を彼等に紹介せば、延て彼れ自ら頭の上らざる結果となるを欲せざればなり。過る總選舉に際し講談師伊藤痴遊の東京市より代議士候補に立つや、彼は二十餘名中唯一の理想候補者なりとして間接に聲援を與へたるが如き、又平素親交なき國民黨一候補者の宣言書を一讀して彼の意見に合致せるものありとし、且つ友人の熱心と義氣とに感じて特に茨城縣に赴援し、推薦演說會に於て官僚政治の弊の由て來る所以を痛論したるが如き、普通人と異

る冷灰式の面目を發揮して餘りあり。長閑の兒にして之に加ふるに學識才幹の凡ならざるを以てす。若し彼にして官生活を繼續せば、彼よりも數年後に大學を出てたる柴田家門の既に親任官となれる今日、夙に司法大臣の椅子を贏得たるべし。去れど稜々たる奇骨を抱きて江湖に居り、其言はんと欲する所を言ひ爲さんと欲する所を爲すは豈に一件食たるに勝らずとせんや。

五

江木の心機一轉したるは吏としての實驗よりし、之に反して佐々木は始めより非藩閥非官僚の洗禮を受けたる野生の反動兒なり。彼れ始め暫く熊本の濟々巖に學びたるも、其智識の大部分は獨學自修より得來れるが如し。彼の名の漸く世に知られたるは日清戰爭後臺灣に於て雜誌「高山國」を發行し、照山獨特の健筆を揮ひて臺灣の稅政に痛撃を加へ、總督府をして隱然一敵國の

感をなさしめたる時にあり。更に名の揚るに至りしは三十八年の夏日比谷事件の連累者として東京の獄に繋がれし時とす。當時政府の一細作は現に彼が國民新聞社の前に立ちて兇徒を指揮しつゝあるを目撃したりと警視廳に報告したるも果して彼はさる行動に出でしや、假に國民新聞襲撃の命令者ありたりとせば、开は眞の佐々木にあらすして其形貌の佐々木に似たりと謂ふまでなりしや、今日に於て之を知り難きも、彼の氣象として寇讎の如くなる桂内閣の遺口に對し、満身の血を沸かしたるは察するに難からず。出獄後去て北清に赴き、それより蒙古に入り、トルハト王家の信用を博して長く其客たりしが、四十年王を伴ひて日本に歸るや、佐々木の聲名益々著聞し、蒙古王の綽名是に於て起る。

四十年の總選舉、彼は郷國より候補に立ちて當選し初め又新會十一人組の

一人たりしが、四十三年進歩黨と又新會の一部と合して國民黨を組織するや、率先して之に投じ、黨中硬派の急先鋒たりしのみならず、第二十五議會より二十八議會に至る四年間、彼の演説と彌次りとは衆議院の名物にして、屢次議長を苦め、反對黨を惱まし、時として不謹慎の譏を免れざりしも、動もすれば隋氣に襲はれんとする議場に活氣を與へ、議席に彼の姿を見ざれば、新聞記者も傍聴者も失望を禁する能はざりき。本年の總選舉は多少の苦戦を免れざるにもせよ、彼も彼の友人も當選を必期したり。彼の多才なる尋常一様の運動方法に出でずして新工夫を案出し、而して専ら言論の力に頼り、主力を大岡育造の地盤侵略に注ぎたり。彼の雄辯は到る處を風靡し、殊に青年は擧げて彼を援けたれば、最初の形勢は無論彼に利にして大岡は屢々危険なるが如く傳へられ、又事實然りしが如し。然も不幸にして敗れたるは大岡の狼

狼して百方挽回の策を講じ、佐々木の爲めに壓迫されたる他の候補者亦た黄金を散じ、而して佐々木は之に堪ふるの金力なかりしにも因れど、實質の伴はざる空景氣を待みて油断し過ぎたること主なる原因の一なるらし。殊に間際に及びて同志應援の爲め選舉區を離れたるの一事は大なる失敗と謂はざるべからず。

諸黨を通じて落選を惜まるゝ者少からざれど、天下萬人より惜まるゝ佐々木の如きはあらず。一彌次り屋を失ふも議會の形勢に何等の變化を及ぼさずといはゞ夫迄なるも、當世無類の珍物たる彼を失ふは政黨活動の上に大なる損害なるのみならず、平凡なる議會をして多々益々凡化せしむべし。此點よりいへばヘツボコ代議士十人の存在よりも一佐々木の存在を以て遙に優れりとす。

六

河野盤洲會て評して曰く、今の長人中奇兵隊の氣骨風格を留むる者は唯だ佐々木一人あるのみと。彼の氣分は如何にも男らしくして一點の虚飾術氣を認めず、眞に男好きのする人物なり。其長大なる軀幹半面を埋むる美髯、颯爽たる英氣、破鐘の如き聲、宛として關羽樊噲の風貌を想像せしむるも、木強の中に無量の愛嬌あり、目を細くして笑ふ時は婦人小兒も懷きて「好い叔父ちゃん」と云はん。去れど彼の氣魄信念は威武も屈する能はず富貴も淫する能はず。曾て或る集會の席上口を極めて長閑の專横を罵る、人あり卿も亦た長閑の一人ならずやと横槍を入るゝや、彼れ勵聲一番して曰く、我輩は長州に生れたるも、日本の佐々木なり、何ぞ一地方一民族のみを見んやと。彼は此意氣を以て衆議院の壇上に立ち選舉に臨めり。其頓智と文藻に富める、

巧みに理屈を附會し、彌次りの如きも當意即妙を極め、簡潔にして自ら文章を爲し、毫も野卑に陥らず。五分間演説と共に天下一品と稱せらる。議會に於ける演説は少しく威嚴に乏しき嫌ひあるも警句百出、聽者をして飽かしめず。是を以て彼の演説は青年に歡迎せられ、一たび壇上に現はるれば、滿場の拍手急霰の如く湧くを常とし、就中選舉演説の如きは何人も彼に及ぶ者なし。

昨年古島の東京市補缺候補に立つや、理想選舉の名を發明したる者は佐々木にして、古島の當選したる亦た彼の辯力大に與る。彼は辯力の外に何人も企及すべからざる武器を有す。健康の力は是れなり。今回の選舉に於て一日平均十數里の道を驅歩き、多きは數回少きも三回の演説を試み、而も一人にして一切の事務を措辨せり。殊に選舉の二日前、福岡より進藤喜平次の爲めに

彼の來援を求むるや、初め固辭して應せざりしも、特使の涙を以て依頼するあり、當時彼の形勢非なるの明かなりしも、義の爲めに涙を飲んで肯諾し急馳福岡に着するや、其足にて直に演説會に臨み、演説を終るや一息だもせずして北行の汽車に飛込み、門司に着すれば復た同志の爲めに要せられて一場の演説を試み、漸く馬關より三田尻に至る汽身中に於て一日の空腹を滿たし同夜更に三田尻に於て政見發表會を開き、閉會後十餘里の惡道を徒歩して岩國に出で、選舉當日の朝大道に天幕を張りて最終の演説を爲したり。其二日間彼は一睡もせずして活動したるも毫も疲色なし。選舉の結果の刻々報せらるゝ時、彼は旅館の樓上に十數枚の紙絹を展べて揮毫を試みつゝありしが、最後の報告に接するや、面上微しく失望の色を認めたるも、一茶頃にして快潤なる佐々木に復し再び筆を執れり。當時彼れ長崎の鈴木天眼に電して曰く

『天下の英雄悉く落つ』と。

想ふに彼の辯力、精力及び人氣を以て始めより東京市に争はゞ、當選第一位たるを得る決して難きにあらざりしならん。彼の東京に還るや友朋皆な語るに此事を以てしたるに、彼れ曰く、意地づくの勝負なれば已むを得ずと。蓋し彼が閩族の發祥地たる長防二州に馬を進め一人を以て數人の敵に當る、照山の照山たる所以此に存す。彼れ縱令一敗するも其眞價は毫も減せざるなり。

戸水寛人と寺尾亨

世に謂ふ所の大學七博士なる者日露戰爭に先ちて或は主戰論を叫び、講和談判に際しては盛んに時局を論じ、爲めに官府の物議を惹起したるも、民間の士皆な彼等の擧を壯として學界の花とまで稱揚しき。最初眞に七人なりしも其中富井政章、高橋作衛、小野塚喜平治の三人は後ち連盟より脱し、代つて岡田朝太郎、建部遜吾事を與にするに至りたるが、此二人は畢竟中途より飛入りたる者、最初より最後まで一貫せるは戸水寛人、寺尾亨、中村進午の三人にして南佐莊に氣焰を揚げたる時代は實際六博士に減じたり。

此一團には初めより首領と稱すべき者あるにあらざりしも、實際は戸水寛人之が牛耳を握りたる形あり、世間も亦た彼の一舉一動に注目しき。今日より觀れば戸水の貝加爾遠征論は天下の形勢に迂なる殆んど白面書生の空論に均しけれど、當時の國民は一廉の卓見の如く思惟し、大學の生徒は彼の擔任

講座たる羅馬法よりも政治論外交論を聴くを喜び、青年は拍手を以て彼の架空的演説を迎へ、戸水の名は貝加爾總督の綽名と共に江湖に高かりき。

四十一年の總選舉に郷國金澤より代議士候補に立つや、彼の友僚は其得策にあらざるを諫説したるも、彼は志を行はんとせば議會に入らざるべからずとて政友會を敵に廻し、専ら言論の力を以て戦ひたり。當時の戸水は七博士以來の人氣尙ほ幾分か存し、且つ舊人物よりも新人物を好むは人間自然の情なるより金澤人の多數は必ず彼の當選を期せざるべからずとて極力援けたれば、彼は敵黨の候補者を一蹴して立派なる勝利を得たり。從來の主張及び事を共にしたる者の顔觸れより觀れば、議會に入るの後は進歩黨若くは又新會に籍を置くの似合はしきに、新議員を打して一團とし議會の一勢力と爲すの理想より戊申俱樂部なるものを起し、隠然首領を以て自ら任せり。當時戊申

派には片岡直温、仙石貢、中村彌六の徒あり、彼等は從來の系統に徴するも其行動に照らすも、純然たる官僚派たるは疑を容れざる處にして、戊申派に關係したる目的の那邊に存するやは問はずして明かなり。戸水が這般の凶狀持と席を同うしたるは初めより官僚派たらんとするの意あるに出でしか、或は政界の事情に盲目なるに出でしか。夫れとも豊臣の天下の徳川に移る前後に於ける加賀の國主前田侯の心術呼吸を學びて政界の日和を觀望したるか、恐らくは第二の理由なりしならんと察せらる。

戸水は性來善良の紳士にして黨界稀に見るの正直者なり。揃ひも揃ひて巾着切の如き人物のみなる戊申派に彼れ一人交れるは眞に不調和の甚しきもの果して彼等の爲めに馬鹿にされ、除者にされ、流石の好人物も到底理想の行はれ難きを自覺して政友會に行けり。或は曰く彼の政友會に入りしは他日西

園寺内閣の外務大臣とするの約束を以て誘はれたるなりと。由來利益問題を以て常套の手段とする政友會としてはさる事なしとせざるも、戸水も策士の言を信じて入閣を夢想する程に馬鹿正直にあらざるべし。去れど之が爲めに彼は郷里に於て不人望なるのみならず、信を天下に失し殊に政友會が昔時敵を攻むるに當り降將を先頭に立たしめたる故智を襲ひ、神戸に於ける補缺選舉に戸水を派して故櫻井一久の同志野添宗三に反對せしむるや、世を擧げて戸水の不徳を指彈し、神戸市民の大なる反感は却て野添に利にして政友會の推薦する松方幸次郎に不利なる結果となりき。蓋し櫻井は同郷の親友にして前年戸水が金澤に候補を争ふ時、特に赴援したる者、彼の意必ずしも忘恩を敢てせんとしたるにあらざるべきも、事の實際は恩人に弓を彎きたる結果となりたればなり。

戸水としては從來の大言壯語の手前、議會に入る以上、必ずや天下の大問題を提唱して三百七十餘の議員を煙に捲かざるべからざる筈、世間も亦初めより斯くあるべしと期待したりき。而も戊申派にある時は一言半句も吐かず、政友會に轉じて漸く二年の後ち即ち第二十八議會に珍らしくも壇上に立ちたれど、雜輩の響に倣ひ七尾灣築港及び金澤高等工業學校建設のお土産案を提出して説明大に努め、鈴木天眼の爲めに擲擲弄弄せられて名士の估券を下る數等なるには世人も一驚を喫したり。人或は戸水の爲めに辯じて曰く、凡そ選ばれて議院に入る以上、一國の政治家としての見識態度を挾持すると共に、他の半面に於ては選舉區民の利害を代表する議員としての心掛なかるべからず。乃ち戸水の後者に於ける云爲のみを觀て直ちに他の半面を無視し、人物の輕重を斷ずるは少しく酷に失するなからんやと。一應理あるが如くなるも、

彼が代議士に當選して以來未だ政治家としての大抱負を認めず、漸く懲罰委員長となりて得意の状あるを遺憾とするのみ。

主戦論時代より戸水と肝膽相照らし、今も尙ほ親善なるは寺尾亨とす。寺尾は福岡の人、理學博士寺尾壽の弟にして久しく大學教授を以て外務省參事官たりしが、七博士事件の際政府の忌諱に觸れ、戸水の大學教授を罷めらるると同時に外務省より退けられたり。今や國際法學者としては高橋作衛、立作太郎、中村進午の如き少壯新進の士ありて寺尾の佛國學派に屬する國際法は聊か陳腐の嫌ひなからざるを以て、猶ほ戸水の羅馬法に於けると同じく餘り學生の喜ぶ處とならず。去れど彼は阿兄壽の學者肌なるに比すれば、芝居氣あり、戸水の如く穉氣満々たらざる代りに老獪なる點あり。襟懷灑落、圓轉滑脱、常識に富み、世態人情に通ずる苦勞人にして、一たび口を開けば諧謔

自在、最も揶揄に長ずるも、他の惡感に觸るゝに至らず、如何なる惡口屋に會するも、巧みに竹篋返しを試みて對手の鋒先を挫くの才あり。

支那革命の擧に際し、彼の渡清したるは法律顧問に聘せられたるが爲めなりといふも、實は大原武慶に欺かれしにて、遜逸仙、黃興等は初めより其意ありしにあらず。彼の大に窮せるを見て當時南清にありし犬養毅の彼を孫黃に紹介したる爲め漸く革命政府に關係するを得しのみ。大學教授の身にして革命黨を援助したるは穩當にあらずとの非難起り、出發後休職處分を受けたる初めより豫期したりとはいへ、革命のこと日本人の意の如くならず、纔に兩三月にして引揚ぐるの止むなきに至りしは彼の大に失望せし處なるべし。一説には多年負債に苦み身を東京に置く能はざる爲め逃出したるなりと。彼の平生より推せばさる事もあるべきか。

